
俺の生徒会

新明 聖凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の生徒会

【Nコード】

N0003E

【作者名】

新明 聖凰

【あらすじ】

親父の立候補により生徒会長になった俺。しかし、俺の学校は普通ではない。しかも俺は臆病。こんな俺に務まるのやら…。

第1話：プロローグ

俺は、青龍高校の生徒会長。もちろん全校生徒が知っている。しかし、生徒によって選ばれた訳ではない。親の立候補で決まるのだ。また、運動会や球技大会、入学式や卒業式の挨拶もない。

極めて楽な生徒会長だと思うだろう。しかしそんなに甘くない。逆に地獄かもしれない。いや！絶対に地獄だ。

さて、この学校はどのような学校か気になっているところだろう。実は、この学校は、プロの殺し屋養成学校なのだ。

この学校は、毎日が戦いなのである。一日も長く生き残り、そして立派な殺し屋となるために、皆が自分の力を磨く。

毎日沢山の人が死に、その代わりに新しい生徒が入学するといった学年など関係のない学校でもある。

基本的に、生徒会vsその他大勢といった形式で行う。

今までの戦績は生徒会が勝っている。まだ2回しか戦っていないが…。

というか、何が何でも勝たないといけないのだ。負けると会長は責任をとって、死刑となる。

その時点で生徒会解散！

なんてバカな制度だろう。という訳で、俺が死刑になるか、ならないか、が毎日懸かっている。

俺は、プロの殺し屋になんかなりたくないのが本音。

生まれたときから、親父に叩き込まれ、それが普通だと思っていた。

実際、通っていた幼稚園、小学校、中学校も似たような学校だったからだ。毎日人は死ななかつたが…。

しかしある日、テレビで皆、熱心に黒板を写し、綺麗な先生が何やら本を読んでいる場面を見た。

何だこいつら？変な奴！と笑っていたが、どの学校番組を見ても同じような場面ばかりで、いよいよ不思議に思った俺は親父に尋ねた。

すると、あれが普通だと答えられた。それにはかなりのショックを受けた。2、3日は立ち直れなかつた。

では、立ち直ったのか？というところでもない。親父に半殺し…いや？死ぬ直前までいったかな？

ともかく！強制的に、かつ、強引に立ち直させられた。

親父は日本中の極道を束ねる会長で、かなり知られている人物だった。

俺は一人っ子のため、後継者として通っているらしい。

親父には、極道の才能があると言われたことがあるが、自分では自覚なし。

ていうか、マジ臆病だし！人なんか殺せませーん！

こんな俺に会長が務まるのやら…。

まあ会長の言い分は絶対なので、俺を守れー！って言うてもいいし。今まで言ってきたけど…。

俺は、臆病だと気付かれないように、一人前に日本刀を腰にぶら下げている。

もちろん街中ではぶら下げていない。銃刀法違反で検挙されるかな。

また、今までに習った暗殺術、殺人術等が頭の中にしっかりと入

っている。しかし使えない…。

使うのが怖いのではない。呪われるのが怖いのだ！

人は死んだら、恨んでいる人を呪い殺すという知識が頭の中で、いつもグルグルと回っているから。

お前は子供か！と昔、組の1人に言われたことがある。

その人は次の日、海に沈んだ。直ぐに親父がやったと分かった。

親父は、身内を大事にしている。身内が貶されたことを知ると、どこまでも追いかける。もちろん部下に追いかけさせるのだが…。

日本中に部下がいるため、簡単に見つかる。

俺は恵まれているのか、そうでないのか、たまに分からなくなる。

はたして、生徒会長を守ることが出来るのだろうか？ではなく、自分を守ることが出来るのか？

今日も守ってもらおう！という気持ちを忘れないでいようと、心に決める俺であった。

第2話：生徒会員

朝の登校は嫌いではない。なぜなら送ってもらえるから。帰りもお迎えが来る。かなり楽だ…というわけではないんだな。

俺は臆病だから、強面の部下が怖い。あの顔で睨まないで欲しい。しかも車の後部座席でその強面に挟まれる形で座る。いつも手は汗ばんでいる。そうしている内に学校に到着。

「行つてらっしゃいませ！」

いつもの台詞。

顔はいつも苦笑いになっていることだろう。軽く手を振りながら、校舎へと向かう。後ろを振り返るとまだ頭を下げている。大変だな…いつも思う。

俺にクラスというものがないため、生徒会室に行く。生徒会室は必要なくらい広いし、豪華。

また、1人1人に豪華な椅子と机がある。といっても5人だけだが…。

会長の机が一番奥にあるから、歩くのがダルい！憂鬱な気分になりながら、1階の奥の生徒会室に到着。

ドアを開けるといつもと同じ顔ぶれがいた。

左を見ると、手前の椅子では、会計の源 茜が手裏剣を見つめている。彼女は手裏剣マニアだと俺は思っている。女！？と思った人もいるかもしれないが、俺以外は、皆女なのだ。

その隣で、書記の闇くろ於美貴みが拳銃の手入れをしている。拳銃って卑怯だろ！俺なんか日本刀だぜ！とも言えない。毎回助けられているから。そう考えると情けなくなる。

でも、生徒会の他のメンバーはそうは思っていないらしい。

「会長の権限は絶対であり、自分の感情は捨てた。」

ときっぱり言われたことがある。

なんていい響きなんだろうと心地よさに浸っていたこともある。

右を見ると、手前の椅子には…誰もいない。

本来は朝倉 晴香の椅子だが、いつもいない。どこにいるかも分からない。忍者だから。この前は天井から降って来た。ビビリまくりの俺を見て、笑った。笑うな！とは言ったが、声が小さかったせいか、聞こえていないようだった。

その隣の席には…パ、パフェ！？じゃない！パフェを食べている
白鳥 樹だ。

小さい体なので小学生にも見える。

毎日朝来ると、何かを食べている。昨日はケーキを5個食べていた。

今日のパフェは美味しそうだ。食べたい！食べたい！しかし恥ずかしくて頂戴とも言えない。

いや！会長命令で貰える。しかし食べものの恨みは酷いって言うからな……やめとこ。

肩を落としながら席へと向かう俺に皆の挨拶が掛けられた。

「会長！お早うございます！今日も一日宜しく願います！」

俺の方が宜しく願いますだよ。と思いながらも、

「おう！まかせとけ！」

と言ってしまう俺であつた。

1日の戦いは、朝9時から夕方3時まで。

途中12時から1時までは休憩タイム。

生徒会5人を相手し、1人倒すごとに賞金が贈られる。会長を倒すとボーナス＋生徒会長に就任となる。

ちなみに前生徒会長は1年間生き残った。すごい人だったようだ。

俺もそんな人になりてーと思うが実行しようとは思わない。なるべく楽な方へ、楽な方へと向かいたい。解るだろ？俺の気持ち！

第3話：自己紹介

午前8時50分。俺は1人緊張していた。

死にたくないけど、殺したくもない…なんて良い人なんだ俺は！
しかし、俺がそんなことを考えているとは思っていないだろう。
なんたって、今の俺の顔は精神統一をしている顔だから。

他の生徒会員は

「会長！精神統一上手いですね。殺気も何も感じませんでしたよ。
私なんて殺気出しすぎてどうしようか悩んでるんです。」

なんて言うし。全然そんなんじゃないのになあ。

いよいよ時になり、チャイムが鳴った。全生徒はおそらくこの
生徒会室に向かっているだろう。

どうしよう…。ん？そうだ！鍵を閉めよう！

早速俺は、鍵を閉めた。他の会員は何かの作戦だと捉えたようで、
尊敬の眼差しを送ってきた。う！まぶしい。

鍵を閉め、ゆっくりお茶を飲もうとした時、沢山の足音が聞こえ
てきた。すると、生徒会室の前で止まり、何やら話をしていた。

「鍵が閉まっとる。ここには居らんのか？」

「いや、いる。足音が聞こえた。」

「皆で壊すぞ！せーの！」

かなりの数の生徒が自分の武器でドアを攻撃し始めた。

3秒後、あっさりと崩れるドア。開いた口がふさがらない俺。役立たずのドア！と思いながらも平静を装い、

「よく来たな！死にたい奴はどいつだ？俺が相手になってやるよ…
…？あ！」

しまった！何かっこつけているんだ！これじゃあ今日の第一犠牲者は俺じゃねーか！やっべ。

敵の目は、ギラギラと俺に向けられ、武器を持ってこっちに向かって来た。

俺は怖くて目を閉じてしまった。しかし、何時になっても痛みはない。

俺はもう死んでしまったのか…。目を開けると、敵は地面に倒れていた。もしかして俺の内なる秘めた力がこいつらを…と考えている最中に、

「会長、全ての敵は私が片付けておきました。」

声を掛けてきたのは、樹だった。手には自分の身長の2倍はありそうな大太刀だった。

大太刀を肩に軽々と乗せて笑った。小学生のような笑みで。いやいや、小学生が大太刀を肩に乗せていたら引くだろ。

「サ、サンキュー…。」

樹はとても満足そうに頷いていた。ホッとしていると、すごい殺

気が近くにあった。

恐る恐る横を見ると、茜と美貴が睨んでいた、俺ではなく樹を。なぜだ？獲物を取られたからか？樹は殺気を受け流し殺気の訳を聞いた。

「私が何かした？」

「ええ！私の人を独り占めにして！」

茜は何か変なことを言わなかったか？私の人？すると美貴も。

「茜さん！私のおかしいんじゃない？私の人なんだから！」

私のおかしい人？もう全然わかんない。このままにしておくとか酷くなりそうなので、仲介に入ることにした。

「ちょっと3人とも、どうしたんだ？なぜそんなにめめるんだ？」

「だって私の人を…。」

最後の方はモゴモゴ言っただけで解らなかった。

「私の人って一体誰のことなんだ？」

3人はこっちに指を指した。俺は振り返ったが誰もいない。ってことは俺？

「お、お、俺のこと！？」

3人はコクコクと頷いた。殺気が嘘のように女の子の雰囲気に戻

っていた。

さてどうしたものか？良いことを思いついたので、1人壁の隅に行き、晴香を呼んだ。

「おい、晴香。」

すると天井から晴香が降りてきた。用件は何かと聞いてくるものだと思ったが、

「女の対処について知りたいのであれば、自分でお考え下さい。私もあの子達と同じ想いなのです。」

それだけ言うと天井裏へと戻ってしまった。私も同じ想い？ってことは生徒会員皆が俺を狙っているってことかよ！

そういつた経験がない俺にとっては、複雑な気持ちだった。4人はまだもめている…4人？そこには、晴香も加わっていた。

晴香は交流を持つとはしないので、珍しい光景だった。これが仲良かったら文句はないのだが。

突然、4人はこっちを向き、ずかずかと歩いてきた。その気迫に押され、敵のはずの生徒は壊されたドアの前で見守っていた。

「会長！」

4人が声を合わせて呼んだ。

「な、何だよ。」

「私たちは会長の名前を知りません！ぜひ、教えてください！」

4人は片膝をつき、まるで王様の命令を待っているかのように頭を垂れた。

「あれ？言ってなかった？俺の名前は神武 空。よろしく！」

「宜しく願います！私たちもぜひ、自己紹介をさせて下さい！」

「いや、今はやばくない？敵さんがドアの向こうにいっぱいいるし。」

「そういうことでしたらお任せを！」

そう言うと、4人はドアの方へと向かい、

「皆さん！私たちは大切な用事がありますので、私たち抜きで戦ってください。ベスト10に残った人には私たちへの挑戦権を差し上げます。これは会長命令なので絶対ですよ！ねっ、会長？」

「あ、ああ。そういうことだ。試合は午後1時から開始するからそれまでにベスト10を決めておくように。それと生徒会室への立ち入りは禁止する。」

生徒たちは、一斉に駆け出した。生徒会室のドアは壊されたので、違う教室から適当にドアを持ってきて付けた。

「これでいいのか？立って話をするのもなんだから、そこに座れ。」

4人は特別大きなソファへと座った。しかし1対4だが。

「では、わたしから自己紹介します。何だか合コンみたいでドキド

キしますね。」

合コンは普通、4対4じゃないのかと考える俺をよそに、かってに自己紹介を始めた。

「私は、源 茜です。14歳です。会計をしています。主な武器は手裏剣です。…胸は小さいですが、空会長はそこそこどうですか？」

はあ！？こいつ今なんて言った？胸がどうとかって言わなかったか？どう言ったら良いんだ！？

あ、頭が混乱してきた。ここで変なことを言つと殺されそうだし…。

「い、いいと思うよ。胸じゃなくて心だっと思っているからね。」

俺は嘘をついた。神様！ごめんなさい！俺は出来れば大きい方が良いです！

俺がこんなことを思っているとは知らない4人は、キヤーキヤー言っている。

「次は私ね。私は、闇 於 美貴。書記担当です。私は拳銃が大好きです。私は結構、暗いとか大人しいとか言われます。胸は、意外とあります。それと、いつかあなたの心を拳銃で打ち抜こうと思っています。以上です。」

ちょっと待て！最後に爆弾発言したよな！胸なんかこの際関係ねえ！

俺は将来こいつに殺されるのか？そんなことまで計画しているのか…。どうすれば、どうすれば…。

「は、早まるな！俺はいつでも受けて立つ。でも話をすれば分かるはずだ！ゆっくり話をしていこう。」

俺は、恋愛に関して、かなりの鈍感だった。

しかし、俺の言葉に美貴は喜んでるように思えた。その顔を見てホッとする俺だったが、まだ2人いた。

「私は朝倉 晴香。忍者をしている。武器は様々。特に忍者刀が気に入っている。担当は風紀。好きな人は家族と会長。嫌いな人はそれ以外。胸は…また2人になったときに教えて差し上げます。」

「いや！教えてくれなくていいよ。何か俺のイメージが、変態に近づいていきそうだから。」

「分かりました、会長がそうおっしゃるなら。それと、いつも会長の傍に控えておりますので、いつでもお呼び下さい。」

ん？いつも控えている？俺が帰宅したときは？…もしかして…いや、これ以上深入りするのは止めよう。晴香が変態に見えてきてしまう。

「最後は私ね！私の名前は白鳥 樹です。会長、分かった？樹よ、い・つ・き。」

こいつ俺を馬鹿だと思っているのか、それとも。こいつは一番食えないな。

「私の担当は甘い物を食べることです！」

「いやいや、白鳥の担当は副会長だろ？」

「そうだったけ？めんどくさいな。」

「何なら私が換わりましょか？」

そう言ったのは美貴だった。他の2人も同じ意見のようだ。

「どうしたんだ急に？」

「いえ、副会長になることで、会長と過ごす時間が増えると思いついて。」

他の2人もコクコク頷いている。

「そっかー。それじゃあこの役は渡さなーい。樹が副会長ね！決まり！それと白鳥はやめて。樹ちゃんって呼んで！」

「却下！ちゃんはなし。」

「えー！まあいいわ。私の武器は大太刀のゴンスケ。あつ、でも今名前変えた。名前は空。会長の名前にした。どう？うれしい？」

「ああ…、嬉…しい。」

それを聞いた3人は何やらブツブツ言い出した。

「何を言っているんだ？」

3人はほっぺを膨らませて、

「白鳥さんだけずるい。私の武器も空にしていいい？」

「私も！」

「じゃあ私は…神武 空…：神 空、神空！神空にするわ。」

「おいおい……………かつてにしろ。」

4人は嬉しそうだったが、俺はかなり疲れていた。自己紹介だけでこんなに疲れるとは…。しかも、また樹が。

「言い忘れていた！私の胸は……………内・緒！！どう？知りたい？ドキドキする？」

「少しだけね…。というか俺はそんなに胸が知リたそうな男なのか？」

4人からは何の反応も帰ってこなかった。逆に不安が膨らんだ。俺が魔法使いだったら異世界にでも逃げるのに…。異世界よ！出でよ！と念じてみたが、やはり出なかった。

軽くショックを受け、時計を見ると、12時までは後5分まで迫っていた。良かった！、やっとこの場から抜け出せると思った。

第4話：黒羽 創

チャイムが鳴り、食堂へと走り出す俺を4人が許さなかった。

「会長。どこへ行くのですか？」

「食堂に。」

「もし良かったら、お弁当作ってきたので食べてもらえませんか？」

「私のもお願い！」

「私のも！」

「実は…私も。」

な、何ですとー！女子に弁当貰うのは初めてだけど、4人分を
食べるのは無理があるんじゃない…。

しかも何気に殺気まで出してるし。ここで断ったら…確実に殺さ
れる。

「わ、分かった。有難く貰うよ。でも、全部は食べれないな。4人
分だし。」

「はあ？」

殺気が先ほどよりも強くなった。

「食べます！食べさせて頂きます。」

とほほ…。俺って会長なんだよな。もしかして会長じゃなかったのか？などと考えながら、弁当を食べる俺であった。味の方は…ご想像にお任せします。

「ごち…そう様…でした。もう…食べ…られない。」

「明日も作ってきてあ・げ・る！」×4

「本気…かよ！……そうだ！日替わりにしよう！それならもつと美味しく食べれると思う。」

「えー！ー！」×4

「これは会長命令だ！」

「…。はい。」

ということで茜、美貴、晴香、樹の順番に決定した。

一番の心配は樹だ。今日の弁当もホットケーキが入っていたからな。しかも、蜂蜜がベチヨベチヨにかけてあったし。

4日後が思いやられる。学校を休もうか…。そう考えた時、昼休み終了のチャイムが鳴った。

チャイムが鳴ると、10人の生徒が生徒会室にやって来た。

その10人は学校でも有名な黒羽会の連中だった。毎日の戦いは個人でも良いが、組を作っても良い。殆どが何処かに所属している中でも有名なのが、黒羽会だ。

黒羽会は黒羽 はじめ 創をトップとし、約150人を会員とする集団で

ある。創は、生徒会長クラスの實力の持ち主で、親は立派な殺し屋。不敵な笑みを浮かべる創に、俺は逃げ出したいほどビビッていた。足が震えないのが良かったが。

「さて、会長さんが言ったとおり、ベスト10に絞つていたぞ。会長さん、俺と勝負しようぜ。」

「え…！？い、いや、（考えろ、俺！考えろ、俺！）…他の連中を倒したら戦っても良いぜ！」

「なるほど、楽しみは後に取って置こうというわけか！そういうことなら、お前ら！やっちまえ！」

「ヘイツ！！」×9

9人の黒羽会の奴等が、生徒会員の方へと向かった。

茜は手裏剣を、美貴は拳銃ではなく、ミサイルを…！？ミサイルはやめろ！皆死ぬぞ！俺はまだ死にたくない！ということで注意すると、渋々拳銃に変えた。

そして、晴香は忍者刀を、樹はいつもの大太刀を構え、戦闘体勢に入った。

茜の手裏剣は一気に3人の心臓を突き刺し、ねじ伏せた。それと同時に美貴が3発の弾を3人に叩き込む。

残りは4人。茜と美貴は、晴香と樹に残りをあげたようで、暇そうにしている。しかしそれも3秒ほどだった。3秒の間に晴香が2人を瞬殺し、樹が大振で残りの2人を真つ二つに潰した。

「…すごい。やっぱり強いな…。もしかして…もう俺の番？」

「会長！頑張ってください！」

「お、おう。任せとけ…。」

「君の下僕たちはなかなかやるね。会長さん、覚悟しなよ。次は俺が会長だ！」

「えー！会長は空会長が良い！！あんななんて嫌だからね。」

「そうそう！会長ぶっ飛ばしちゃって！」×3

「俺はかなり嫌われているようだね。じゃあ、まずは君たちから解らせてあげるよ。」

そう言くと、創は4人の方へと歩こうとした。しかし1歩目を踏み出したところで創の姿が消えた…と思ったら、向こうに、創がこちらを向いて立っていた。

あれ？4人は？と思うと、うめき声が聞こえたので、床に目を向けると、4人が倒れていた。腕や足から血が流れ、立てないようだった。

「おい！お前、何しやがった！」

「僕は、この子達に僕の力量を見せつけただけさ。これで僕には逆らえないだろう。次は命が無くなるからね。」

「ふ、ふざ…けるんじゃないわよ…。あん…た、なんか…には従わ…ないからね！」

樹が苦しそうに言った。他の会員も何か言いたそうだったが、あまりの痛さに言えなかった。

「ほー、まだ喋れるんだ。しかも、まだ抵抗？それじゃあ死ね！」

「やめろー！」

俺は樹の前に飛び出し、日本刀を抜き、何とか創の刀を受けとめた。

「すごい力だ。両手で受けとめてもやばい…。」

「会長さんの力量はそんなものか。他の生徒会員の方がよっぽどマシなんじゃないかな？」

「う…。そ、その通りだ。こいつらに俺はいつも守ってもらっている！でもな！今日は俺がこいつを守る！お前なんかに渡してたまるか！」

「意気込みは十分らしいな。でも、会長さんを倒して、新会長になるよ。ついでに会長さんの妖刀村正も頂くとするかな。」

こいつ、気付いていたのか！俺の持っている刀が、あの有名な村正ってことを。

「さて、会長さん。かかってきな。」

「うおー！」

今まで習ってきた戦術を最大限に活かし、回転切りをお見舞いし

た。

が、そこに創はいなかった。気付いたときには背中も腕も足も切られていた。しかも全然見えなかった。

「う…。」

「弱いね。もしかして、殆ど実戦経験なし？あーあ、つまらね。ちやっちやと終わらせ。じゃあね、会長さん。数十年後に天国で会いましょ。」

第5話：神降臨

人は、絶対的な窮地に陥った時、物事がスローモーションに見えると言うが、俺は今、それを経験している。

創がこちらに向かう動きも、振り下ろす刀の軌道も。

しかし俺は動けなかった。動いていたとしても俺の動きはスローだっただろう。

あー、何てあつけない人生なんだ。こんなことならもっと楽しんでおくべきだった。

彼女とデイズニールランドに行ったり、家庭を持って平凡に過ごしたり…。もっと両親と話しておくべきだった。俺が死んだら悲しむだろうか？生徒会の奴らは悲しむかな？結局、守ることが出来なかった…。

何て俺は頼りにならないんだ。どうして親父は俺を会長にしたんだろ。ごめんよ…茜、晴香、美貴、樹、お袋、そして親父！

その刹那！声が聞こえた。

……私が、力を貸してやろう…

『我、神魂を解き放ち、降臨す！』

口が勝手に動いた。そして、眩い光が俺を包んだ。しかし、その後の記憶はない。

「な、なんだ！？一体何が起こったんだ。しかもお前は誰だ？」

空の目は赤く、髪も赤髪へと変わっていた。

「我は、安倍 晴明なり。元は人間。今は神となっておるがの。汝が空を殺そうとしたのか？空は特別な人間じゃ。もし殺そうとするならば……神界の神々が相手になるぞ！」

「はあ？何言っただ？安倍晴明って言えば、あの有名な陰陽師じゃないのか？」

「ほー、良く知っておるな。なら我の力は知っておるな。降参するが良い。」

「何を言っただ？頭おかしいんじゃないのか？神なら証拠を見せてみな！」

「…やれやれ。」

そう言つと、晴明は右腕を天に向けて高くあげた。そして、刀印を結び、

「雷神召喚！」

叫んだ瞬間、部屋の中であるのに、雷雲が発生した。そこから雷が多数落ち、創の周りを黒く焦がした。

「な、な、何が…起こったんだ？本当にあんたが…？」

「我が神だという事が理解できたか？」

「あんたは神じゃねー。あんたは人間だ！」

「神にあんたとは…態度がでかいの、小童が！」

ついに晴明が怒り、電球や窓ガラスが片っ端から割れた。そして、刀印を結んだ手を口の前に持って行き、

「風刃列破！」

唱えた瞬間、緑色の刃が無数出現し、創の体を引き裂いた。

「す、すみません。僕、いえ私が間違っております。どうか怒りをお静め下さい……………とでも言うと思ったか！」

創は晴明に切りかかった。晴明は動かず、冷たい目で創を見つめていた。

「こやつは何を言っても無駄じゃな。仕方あるまい。天罰を受けるが良い。」

晴明は手のひらを創の方へと向けた。すると、衝撃波が創を襲い、創は割れた窓ガラスを越え、外まで吹っ飛んだ。しかし、起き上がり、こちらへと走り出す。

「くそつたれ！いくら神でも殺してやる。オンアビラウンケンソワカ！」

創はテレビで見たことあった呪を唱えた。しかし効果は全く無し。

「神を殺すなどとは笑える。我はとっくに死んでおるのに。しかも

そんな呪が効くと思っ たか！」

「うるせー。黙れ!!」

「どうしようもない奴じゃの…。安倍清明が命ずる！死神の名を持ちし神よ、あやつを地獄へと誘え！」

創の周りの空気が黒い霧に包まれた。

「何だ！真っ暗だ！何も見えん！助け…。」

霧が晴れる頃には創の姿はどこにもなかった。

「汝の体と魂は地獄界じゃ。1からやり直すが良い。修行が終わったら現世に帰らしてやろう。我もそろそろ帰るとするか。女子達よ、空のことをこれからも宜しく頼むぞ。」

そう言つと、刀印を組んだ手を横に振り払った。すると、生徒会員の傷が治ったではないか。

「あれ？全然痛くない。あ、ありがとうございます。」

「ほ、本当だ…。会長つてもしかしてすごいのかも。」

そう言っている間に俺は床に倒れていた。もちろん目は黒色、髪も黒色で。

「会長！」

「だ、大丈夫。あれ？創は？ん？傷が治っている。どういふこと？」

4人は顔を見合わせて笑った。

「内緒！！」×4

なぜ笑うの？全然覚えていない！誰か教えてくれ！俺の気持ちも空しく、誰も教えてくれなかった。

「会長！」×4

「ふえ？」

「私と付き合って下さい！！」×4

「な、何だつてー！？えらい急だな！」

「とても強い会長を見たら、ビビツときちゃいました。」

と樹。

「とてもかつこ良かったです。」

と美貴。

「これから私だけを守ってください！」

と茜。

「私のそばに居ないと…。」

と晴香。

「1人だけ少し違うが、俺は一気に4人から告白を受けたのであった。もしかしてモテ期？」

「考えておきます！では！」

そう言う俺は出口へと走り出した。全速力で。

「そんなー！待ってー、てか待ちなさい！」

こうして長い1日が終わるのであった。

第6話：大和 健

俺はいつもより早く起床した。それは寝すぎたからだ。

昨日学校から帰ると、急に疲れが押し寄せ、そのまま深い眠りについた。10時間以上は寝ているだろう。

今は午前5時半を回ったところだ。何もすることがないので、昨日の声について考えていた。

「誰なんだ？しかも記憶がまったくないし…、創は消えてしまっし…。何があっただんだ？」

もしかして！俺は呪われているのだろうか？そうだったら御祓いに行かなければ！

しかし…どちらかと言うと助けてもらったんだよね…。んー分からない！親父なら知っているかな？結構、信神深いし…。後で聞いてみよう…。いや、今から聞こう。スッキリしないのは嫌だからな。

俺はゆっくりと部屋を出た。そのまま廊下を奥へと歩くと、突き当たりに親父の部屋がある。

襖に耳をつけ、耳を澄まして何も聞こえない。寝ているのだろうか。

後にした方が良いのかと悩んでいると、後ろから声を掛けられた。

「空。こんなところで何をしているんだ？わしに何か用か？」

「親父！脅かすなよ。」

俺は驚きのあまり心臓が飛び出そうだった。まだ心臓がバクバク
いつている。

「少しは落ち着いたか？で、何か用か？」

「実は話したいことがあるんだ。」

「何やら深刻そうだな。部屋に入れ。ゆっくり話をしようではない
か。」

俺と親父は部屋へと入った。親父の部屋はがらんとしている。
日本刀が沢山飾ってある。その中のお気に入りを俺にくれた。そ
れが村正だ。

親父は布団を片付けると、机と座布団を用意した。

「座りなさい。」

「はい。」

「で、話しというのは、もしかして誰かの声が聞こえたとか？」

「え！？なぜ親父がそのことを？」

「…やはりな。この話をすべきか…。」

「親父！教えてくれ。俺はモヤモヤが残るのが大嫌いなんだ。だか
ら…。」

「分かった。お前がそこまで言うのなら、教えてやろう。だが、こ

の話聞いても驚くなよ。」

「わ、分かった。」

「まず、空、お前は…本当は…わしと鈴の子供ではないんだ。」

「……………え……………。どういこと…………。」

俺の頭の中は気持ち悪いほど真っ白になっていた。

「さっき言ったとおりだ。」

「うそだ！俺は、親父とお袋の子供だ！そんな話は信じられるか！
！」

親父が話をしていたが、全く聞かず、逃げ出した。

「こら！空、待ちなさい！まだ最後まで話しは終わっておらん！」

すまん、親父。何を言われてもいいような覚悟はしていた。だが…俺が子供じゃないって？そんなこと誰が信じれるんだ！くそつ！聞くんじゃなかった…。

俺はいつものように登校した。朝ご飯は食べていない。食欲が湧かなかった。

「行つてらっしゃいませ！」

「ありがと…………。」

組の連中は、俺がいつも何も言わないので、驚いていた。そのまま振り返らず、生徒会室へと向かった。

生徒会室のドアは綺麗に直っていた。ドアを開けるといつもの風景が広がっていた。

「会長！お早うございます！」

しかし、見知らぬ人が1人、ソファーにちょこんと座っていた。

その男の子は背が低く、顔も幼いので、樹といい勝負をしていた。俺は、茜に聞いてみることにした。

「おい、あいつは誰だ？」

「あの子は今日入学してきた子。名前は確か……。」

「大和 健です。先輩より1つ年下です。宜しくお願いします。」

「ああ、宜しく。えっ！年が1つ違うだけ……。で、なぜここに？」

「実は、会長はご存知なのか、分からないのですが、会長には大いなる神々がついているのです。」

「はあ……何だつて？」

「あー、ご存じないのですね。えーと……。」

「ここじゃ何だから座って皆で話しよう。茜、美貴、晴香、樹、ち

よつと集まってくれ。」

4人は返事をし、ソファーに座った。が、4対1で。

「なぜ俺の横に4人がいるんだ。2人はあっちに座れ。」

「えー！嫌だ！」

「会長命令！」

「ちえっ！じゃあ、じゃんけんね。じゃんけんはい！」

結局、俺の両隣には晴香と美貴が、向かいに茜と膨れっ面をした樹と健が座った。

「で、分かるように説明してくれ。」

「はい。まず、この世には選ばれた人間とそうでない人間がいます。私と会長は選ばれた人間。他の人は…さて置き、選ばれた人間には神がついています。その神が窮地に陥ったとき助けられます。」

「じゃあ、もしかして昨日のは…。」

「経験されていたんですね！で、どなたが現れたのですか？」

「いや、俺は覚えていないんだ。」

「確か、安倍晴明が現れたわ。」

「そうそう！すごかったんだから。」

「晴明様ですか。しかし、あなたにはもつとすごい方々がついていますよ。」

「普通、選ばれた人間には何人ぐらいついているんだ？」

「普通は1人に1人です。例外は見たことはありません。ですが！会長はすごい！数え切れないほどついています。と言っても誰とは分からないのですが。」

「…そうか。すまないが、今一、信用できないんだ。何か証拠を見せてくれないか？」

「そうですね。解りました。私についている神様は日本武尊様です。神話で有名なスーパーヒーローですよ。では、」

『汝、私の体に降臨せよ、日本武尊！』

健の体が光に包まれ、現れたのは目が青色で、髪が逆立っている健の姿だった。しかも背が伸びている…。

「そなたが、会長ですか…。ところで会長とは何でしょうか？」

「…。会長とは生徒の代表のような者です。で、あなたが日本武尊…ですか？」

「いかにも。信じていただけましたか？」

「まあ…。昨日のことを考えると、信じなくてはいけないでしょうね。」

「宜しい。昨日の奴とは大違いですね。」

「失礼ですが、昨日の奴って…創の事ですか？」

「左様。あやつは安倍晴明によって地獄へと送られました。今頃ピーピー泣いていることでしょう。」

「あのー、創を助けてあげてもらえませんか？」

「な、何という心の広いお方！あなた様がそうおっしゃるのであれば、神界の翁と相談して還して貰う事に致しましょう。」

「有難うございます。」

「何かご質問は？」

「そうですね…。なぜ俺にそんなに沢山の神様がついているのかご存知ですか？」

「それは、あなたのお父様が知っていることでしょう。直接聞いてみてはいかがでしょうか？」

「親父が！そうですね。」

「あなたには、本当に沢山の神々が守っていらつしゃいますので、心配なさらずに。では、そろそろ帰りましょうか。」

そう言うと、健が元に戻っていた。

「ふー、疲れますね。で、理解できましたか？」

「何とか理解できた。でも頭がごちゃごちゃしている。そうだ！健、生徒会員にならないか？そうすれば色々と教えてもらえるからな。」

「え！私ですか！？そんなとんでもない！」

「嫌か？」

「いえ！嫌ではございません！分かりました。大和健、あなた様に
ついていく事をここに誓います！」

「おいおい…。大げさだな。役は…掃除係！」

「はい！喜んで！」

こうして生徒会員が5人に増えたのであった。え？勝手に増やして
良いのかって？いいの、いいの！会長だから。

第7話：2人の死

「皆さん！宜しく願いします！」

健が言い終わった瞬間、天井が真つ黒に染まり、ドスンと何かが落ちてきた。

「な、何だ！？何が落ちてきたんだ？」

「会長は私が守りますので、安心してくだ…、ん？この人は？」

「あー！！」×5（健以外。）

何と落ちてきたのは、黒羽創だった。

「痛い…。ん？ここは…！俺、還ってきたんだ…！会長、ありがとう！俺もつ一生還ってこれないかと思った、…どうした？」

「いや…後…ろ…。」

「後ろ…。ギャーーーーー！」

創の後ろには黒いマントを着た若い男の人が立っていた。ごっつい怖い人だな。てかどこから入ってきたんだ？

「なぜ…死神…が…。」

「死神！！助けて！私まだ死にたくない！！」×3（美貴と健以外。）

「なかなかいい男。会長ほどではないけど。」

と美貴。健は知っているかのように平然としていた。

「私は死神の朱里と申します。以後お見知りおきを。先程、神界から連絡がありまして、こいつを帰還させました。しかし閻魔大王の判断により、私がこいつを監視することになったのです。もし次、空様を殺そうとした場合には、一生地獄で過ごすことになるでしょう。」

「なぜ俺が…こんな目に！！でも…地獄は嫌だ！！針地獄なんて痛すぎるぜ。」

「そんなに…痛いんだ…。」

俺は聞いただけで尻が痛くなってきた。でもなぜ神がそこまでするのだろ。もしかして、親父の話に答えが…！？

そうしている間に、9時になってしまった。チャイムが鳴ると、いつも通りに沢山の足音がこっちへ向かってきた。

「結局俺はどうしたらいいんだ？」

創は敵なのだ。しかし、俺を殺そうとすると地獄行き。ということとは選択肢は一つ。

「俺の仲間に、生徒会員になったら？その…仲良くしようぜ。」

「会長……。仕方がない！ここは俺に任せな。こう見えても手下が

沢山いるんだぜ。」

創は手下が目に入ると、声を掛けた。

「おい、野郎共！会長を守りな！」

「はあ？あんた誰？皆、黒羽会を抜けたんだよ。あんたは一人ぼっちさ。俺たちは、チン・シオンさんのシオン会に所属したんだよ。シオンさんはあんたと違って優しい人だぜ。」

シオン会は、最近、急成長している会である。優しい言葉で会員を増やしていると聞いたことがある。

「そ…ん…な…。」

創はショックが大きかったのか、その場に座ってしまった。

「チャンス！皆、こいつを殺っちまおうぜ！」

「おう！」

「くそ！おいお前ボーとしてんじゃねーよ。結果！」

そう言ったのは死神だった。死神はドアに不可視の壁を作った。

「俺はお前が嫌いなわけじゃないんだぜ。よく覚えとけ！」

敵たちは、入り口があるのに入れないことに、かなり慌てていた。

「な、なんだこれは！入れない…。どんなトリックを使ったんだ？」

叩いたり、蹴ったり、銃を乱射したりしているがビクともしない。

「シオンさん！どうかしてくださいよ。」

「分かつたネ。ドウニカスルネ。コンナコトモアロウカト、オ札ヲ用意シタヨ。」

シオンはお札をペタツと貼った。すると、パリンと音を立てて境界が崩れた。

「しまった。油断したぜ。もつと強い結界にしとくべきだったな。俺達死神は殺人を禁止されているから、後の事は任せたぜ。」

「私達に任せなさい！」×4

樹の大太刀が炸裂！5人が一瞬で吹っ飛んだ。美貴は確実に、しかも的確に相手の心臓に弾をぶち込んだ。茜は…手裏剣を磨いていた！！

「まだ手入れしていなかったの。ごめんなさい、後は任せるわ。」

なんじゃそりゃ！？磨いとけよ！とも言えない。何て小さい男なんだ。

晴香は爆弾をドアの方へ…放り投げた…！！マジかよ！隠れろー！と思っただが間に合わなかった。

派手に爆発し、ドア周辺が吹っ飛んだ。周辺にいた人物は確実に死…ん？1人立ってる！あ、あれは、シオンだ！何てしぶとい男なんだ！てかどうやって防いだ？

晴香は何とか天井に逃れたようだ。しかし血が上からばたばたと落ちている。

「全然心配要…らないわよ。あは…。」

樹は腕と足を撃たれたようだ。何とか呼吸をしている。

「……………」

美貴は俺をかばおうとして撃たれた。ピクリとも動かない。

「おい！美貴！しっかりしろ！くそっ！創は？」

「あいつは死神の俺をかばって撃たれやがった。あの…バカヤロウ！…」

「そんな…。美貴…創…。俺はどうしたらいいんだ！俺に力があるなら使いたい！…神よ！俺に皆を助けることが出来る力を与え給え！…」

……貴様の声、届いたぜ。俺が助けてやるよ！……

『我、神界の戒めを打ち破り、現世へと降り立つ！』

「この神気は…まさか！素盞鳴尊（スサノオ尊）か…。」

死神は固まっていた。俺は七色の光に包まれたと思うと、違う人格になっていた。

「俺が邪魔者を排除してやるよ。で、そのアホ面がそうか？」

「私ハ、アホ面ジャナイネ。アナタハ誰ネ？スサノオ尊テ誰？」

「俺を知らないのか！俺様は、山岐大蛇を倒した素盞鳴尊様よ！覚悟しな。」

「スサノオカ何ダカ知ラナイケド、コノ秘密兵器ニハ勝テナイヨ。」

「じゃあやってみな。」

「言ワレナクテモ、ソウスルノネ。」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ。

「ヤッタノネ…マジデ！？ナゼ生キテルノ？……………当タラナカツタノカナ？モウ一回イクヨ。」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ。

「コレデ死ンダカナ？」

「誰が死んだって？こんな鉛弾が効くと思っただけか？」

「ナゼ？ナゼ？ナゼ？ナゼ？ナゼ？私ハ夢ヲ見テイルノカナ？」

「じゃあ、夢のままあの世に送ってやるよ。俺は安倍晴明ほど甘くはないからな。覚悟しな！」

そう言うと、素盞鳴尊は右手で印を結び、叫んだ。

『素盞鳴尊が命ずる！天空より舞降りよ、鳳凰召喚！』

いきなり空が真っ赤な色に変わったと思った瞬間！上空から真っ赤な鳳凰が飛んできた。しかもその鳳凰が近づくにつれ、暑くなっていく。

「何ナノネ！！暑イノネ！分カラナイノネ！」

「鳳凰は、心が綺麗な奴じゃないと見えないのさ。お前には見えていないようだな。残念！鳳凰よ！このアホ面を燃やし尽くせ！」

鳳凰は高い雄叫びを上げるとシオンへと向かった。が！鳳凰はシオンに近づけずにいた。それどころか帰ってしまった。

「お、おいっ！なぜだ！」

「フッフ。モシカシテ、コレノセイカナ？」

シオンは懷から何やらお札のようなものを取り出した。

「そ、それを何処で！」

素盞鳴尊から余裕が消えた。シオンが持っていたのは神の祟りから守護するお守りであった。

「だから俺の結界も破られたのか…。」

死神は悔しそうに言った。

「コレハ私ノ父カラ貰ッタノネ。モシカシテ形勢逆転デスカ？」

「これじゃあ俺には……どうしようも……ない。どうすれば……。」「

第8話：復活

……仕方がないですね。あなたは下がちなさい。私がどうにかしましよう……

「この声は……姉さん!？」

俺の体がいきなり元に戻ったかと思うと、違う誰かが俺の中に入ってきた。

「私は、素戔鳴尊の姉の天照大御神と申します。人々を殺そうとしているのは、あなたですか？」

「…アナタ変ネ！コロコロ声ヲ変エテ、変人ナノカ？」

「まあ、私を変人呼ばわりしたのは、あなたが初めてよ。その罪は重いわよ。」

「ヤレルモノダッタラ、ヤッテミナ！私二八、コノオ札ガアルノネ！」

「私は弟と違って慈悲で罰を与えますから、それは意味ないわよ。」

「嘘言ッテルネ！心理戦デハ負けナイヨ。」

「……本当にダメな人ですね。では、遠慮なく！」

天照大御神は、両手で印を組み、眩いた。

『天照大御神が命じます。諸々の神々よ、貴方達の功德を以って天罰を下しなさい。』

シオンの体が、眩い光に包まれた。すると宙に浮かび、そして窓をすり抜け、空へと消えていった。そして、お札だけがひらひらと落ちてきた。

「あのお札は燃やしておきましょう。炎蛇！」

そう唱えると、天照大御神の手から火の蛇が出て、くねくねとお札の方へ近づき、お札を食べてしまった。食べ終わった蛇はゆつくりと消えていった。天照大御神は美貴と創の方を見た。

「あら…。その2人は死んでいるようね。どうしましょ。」

「天照大御神様！どうかこの2人を助けてあげてもらえないでしょうか！私の命を差し上げます。」

死神は天照大御神に土下座した。何回も何回も。

「そうね…。でも1人しか駄目だわ。どっちにする？」

「そ、そんな…。創か女子か…。そんなこと選べない。」

「それじゃあ駄目ね。1分間をあげるわ。その間に考えなさい。」

天照大御神の表情は厳しかった。そりゃそうだろう。命はどちらも平等なのだから。

しかし、死神は創を生き返らせたかった。では美貴はどうなるのか？空を守るために死んだ。それは正しい判断だったろう。愛する者を助けたのだから。

「時間よ。どうする？」

「俺は…俺は…創を助ける！女子よ、すまない。」

「分かったわ。」

『天照大御神が命じます！死神の魂と引き換えに、黒羽創の魂よ、現世の器へ舞い戻りなさい！』

死神の体は徐々に消えていった。その代りに、創に気が戻り、息を吹き返した。

「ぼ、僕は…。朱里…ありがとう…。」

創は声を殺して泣いていた。

「もう1人は残念だけど…。」

………ちよつと待ちな！………

空から声が聞こえたかと思うと、いきなり雲の間からデカイ龍神の顔が降りてきた。

「あなた！その姿は！」

天照大御神はかなり驚いていた。

「これが俺の真の姿なんだから、そんなに驚くなよ。」

「あなた今までその姿は。」

「何だか今日は機嫌が良くてな。美貴よ、感謝するが良い！」

龍神は手に持っている珠を教室へとかざした。珠から強烈な光が飛び出し、教室全体を覆った。

光が止むと、教室はボロボロだったが、美貴が生き返り、皆の傷が癒えていた。

「さらばだ！また会おう！」

龍神は雲の間をすり抜けて天へと帰っていった。

「素盞鳴ったら、粹なことを。私も帰りましょうかね。久しぶりにあの子と祝杯でもしましょうかしら。」

そう言つと俺の体から出て行つた。

「……………ん？美貴！創！大丈夫か！…あれ？ピンピンしてる。さっきは死んでたよな！？」

「あら！覚えてないの？」

「うん、全然。すっぽりと記憶が抜けてるんだ。で、シオンはどう

なった？」

「ピューっってお空に消えて行ったよ。」

樹はさも可笑しそうに身振りで教えてくれた。

「ピューとねえ……。どこに行ったんだろ？まあいいか！皆が無事だし！……創、大丈夫か？」

「……。俺のせいで……。すまない。」

「そう思うなら、誠実な人間になるんだな！」

そこには死んだはずの死神の姿があった。

「ギャーーーーー！お化けー！」×1（俺だけ。）

「どうして……？」

「いやー、俺にも良く解らないんだが、どうも素盞鳴尊と天照大御神の御配慮で生き返ったらしい。ま、元々死んでいるがな。」

「この！心配かけやがって！」

創は死神に抱きついた。

「おいおい、俺は男と抱きつく趣味はないんだがな。今日だけだぞ！」

「ねえ！これから、学校を抜け出してお昼ご飯でも食べに行かない

「？」

樹が提案した。時計を見るとすでに昼休みは終わろうとしていた。午後になると、また一斉に押し寄せてくる。

「でも、午後はどうするの？」

「大丈夫！朱里さん（死神）の結界でどうにかなるでしょう！」

樹はサラッと云った。確かに結界は良いけど、さつき簡単に破られたしな。

「ねえー！いいでしょ！死神さん！お・ね・が・い。」

「うむむ…。」

「私たちからも、お・ね・が・い！」

「仕方ありませんな！女子達からこんなに頼まれては！この朱里にお任せください！」

朱里は手を合わせ、結界と叫んだ。すると、先程は透明だったが、今度は真っ黒な壁が出現した。

「この結界は特殊でね、通り抜けると地獄界へと繋がっているのです。そこでは沢山の死神と鬼達がいいますから、慌てて引き返すことですよ。」

「すっごーい！さすが朱里さん！じゃあ早速行きましょ。」

第9話：閻魔大王

お昼に何を食べるか議論しながら、教室の外へ出た…つもりだった。

朱里の失敗は俺たちが出てから結界を張ればいいものを、出る前に張ってしまったことだ。つまり、俺たちは地獄界へと来てしまった。

そこにはすごい光景が広がっていた。火の海、針の山等等、漫画に出てきたとおりの光景だった。しかも、朱里よりもっと恐ろしい顔をした死神や、身長が15mはありそうな鬼がウロウロしていた。

「な、何だ…めっちゃ怖い。」

「僕なんて針山に落とされたんだから！」

「良い所だろ？」

と朱里。

「……。」

皆黙ってしまった。だが、引き返そうとしようとする者はいなかった。

7人の視点は奥にいる巨人に注がれていた。

その巨人は豪華な椅子に座り、机で何かの書類を書いていた。どこかで見たことがある。あれは…あれは…ドラゴンボールだ！そう

「閻魔大王！しかし、ドラゴンボールの閻魔よりも、もっと迫力があるが。」

「もしかして、あの人は閻魔大王？」

「ピンポン！大正解！おつかないだろ？紹介してあげようか？」

ブルブルブルと皆一斉に首を振った。

「遠慮しないでいいんだよ。なあ閻魔様！」

おい！なぜ呼びかけるんだよ！一斉に現世へ引き返そうとしたが遅かった。閻魔大王がこちらに気付いた。

「お？朱里か！そちらの童達は？」

「はい、神々の恩恵を受けし空様、そして+αです。」

「おいおい、+αはないだろ！」

創が反論した。

「そうか！よく来てくださった。空様、+αよ、こちらへ。」

創の反論は無視された。近くに寄って見ると大きい！あまりの大きさに首が攣りそうだ。

「でけー…、痛ててて。」

「これはこれは、失礼した。」

閻魔大王は指を鳴らした。すると閻魔大王の体が徐々に小さくなり、俺たちと同じくらいにまで小さくなった。

「ここでは何ですから、奥の部屋でゆっくりお茶でも飲みながら話しましょう。」

「はあ…。」

閻魔大王は先程まで座っていた椅子の下まで行くと、取っ手を回した。

取っ手！？おかしいだろ。椅子に取っ手なんて付けるか？しかし、意外にも部屋があった。部屋の中には誰もいない。机や椅子など、一般的な家具が取り揃えてあった。

「適当に座って下され。空様はそちらに。」

「なぜ、俺だけこっちに？」

「そちらは上座ですから。」

「はあ。では、お言葉に甘えて。」

色々な話をした。樹の趣味とか、樹の好きなフルーツとか、樹の…。樹ばかりじゃねーか！俺はお茶ばかり飲んでいた気がする。あと地獄せんべいも食べたっけ。なかなか美味しかった。

樹はもつと話をしたかったみたいだが、閻魔大王が降参した。閻魔大王に、今度来る時は俺1人で来るようにと頼まれた。こうして地獄見学は終了したのであった。

現世に帰ってきたのは、5時を過ぎてからだった。結果は何とか無事だった。皆諦めたのだろう。そろそろ帰るとするか。帰ってきたんと親父と話をしよう。

「じゃあ俺は帰るわ。」

「会長！さようなら。」×4

「会長、僕が送りましょうか？」

と健に言われたが、丁重に断った。そして、

「会長さん、お願いがあるんだが。」

言い出したのは創。

「僕を生徒会員に入れてくれないか？皆の力になりたいんだ。」

「いいよ。ただし、お茶入れ係ね。」

「おう！…え！そんな――！」

創が後ろで何やら抗議をしていたが聞えないふりをした。

第10話：空の出生

家に帰ると、真つ先に親父の部屋へと向かった。

「親父。入っていいか？」

「ああ。入りなさい。」

「失礼する。」

俺は部屋に入ると親父の前に行き、謝った。

「今朝はすいませんでした。俺が教えて欲しいと言ったのに、勝手に逃げ出して。」

「気にしていない。どちらかと言えば嬉しかった。空に父親だと見てもらえて。」

「え！？俺の親父は1人だ。お袋も。」

「そうか。じゃあ今朝の続きを話していいんだな？」

「おう！覚悟を決めた。」

「じゃあ話を再開しよう。空の親については今朝話した通りだ。だが、この話には裏がある。空、お前は空から降ってきたんだ。」

俺は理解できなかった。子供が空から？ありえねーだろ！しかし親父は嘘をつかない。よく話を聞いてみよう。

「わしが丁度30歳の時、子供が出来ずに悩んでいた。しかし、わしより鈴の方が悩んでいた。鈴はどんな体調が悪くなり、遂には起き上がることすら出来なくなっていた。わしは神を恨んだ。なぜこんなに苦しめるのかと。子供が気に入らないからと言って、殺す親もいるのに、なぜだと。そんな時、鈴が外を見て固まっていた。わしはどうしたのかと思い、振り返ってみると、1人の赤ん坊がゆつくりと空から降りてくるではないか。わしは夢を見ているのだと思つたよ。今の不幸も全て夢だと。しかし、その赤ん坊の産声を聞いた時、確信した！これは夢ではないと。起き上がることが出来ない鈴が、必死に起き上がり、ふらつきながらも赤ん坊の許へと行つた。そして赤ん坊を抱くと、頭に響いてくる声が聞えた。」

『一生懸命生きているそなた達に、褒美を与えよう。その子は神々の子である。その子は将来、そなたたちにとつてかけがえのない存在になるだろう。そなた達が死ぬその瞬間まで、その子を育ててみせよ。もしも、途中で投出す事があつたなら、神々の天罰が下るだろう。しかし、その子が窮地に陥つた時には、神々がその子を全力で救うことになるだろう。では、さらばじゃ。』

と言つて声は聞えなくなつた。

「それからわしと鈴は本当の子供のように育てた。一度も投出そうとは思つたことがない。しかし、この事実を教えるために、あえて危険度の高い生徒会長に立候補させたのだ。分かつてくれ。」

「そんな事が…。親父…。ありがとう。俺頑張るよ！」

「そうか！わしも応援するぞ。ところで明日から何があるか知っておるか？」

「いや、何も。何があるんだ？」

「実は、明日からは学校ではなく、ここに行つて欲しい。」

親父が取り出したのは、一枚の紙だった。その紙には、

「集え！全国の殺し屋を目指す、生徒会員達！」と書かれてあった。

「何だこのチラシは？」

「これは、年に2回行われる大戦闘会、つまり甲子園のような大会だ。」

「その大会に俺が？」

「当たり前だろ。もちろん他の生徒会員も参加可能だ。3人1チームでトーナメントを行う。明日から3日間は予選が行われる。そして、勝ち残った1校だけが全国大会へと進むことが出来る。」

「そんな大会があつたのか。で、どこに集まればいいんだ？」

「神戸だ。」

「神戸！？そんなところまでどうやって行くんだ？」

「心配はいらぬ。ちゃんとへりをチャーターしてある。また7人の生徒会員にも連絡済みだ。」

「なぜ7人だと知っているんだ？」

「わしは何でも知っておる。女子達が空に恋心を抱いていることもな。」

「ま、マジかよ!？」

俺はとても恥ずかしくなった。親父は呑気に笑っている。俺はまだ大会がどのようなものかも知らずにいた。

「久しぶりにわしと風呂にでも入らぬか？」

「え…。別に良いけど。」

「そうかそうか！鈴！風呂を沸かせてくれ。空と一緒に入るんだな。」

「はい、すぐに沸きますから、準備してて下さいな。」

「ほら、行くぞ。」

「お、おう。」

こうして数年ぶりに親父と風呂に入ることになった。

高校生になって親とお風呂に入るのは何かと気が引けるものだ。

分かるだろ？温泉に行った時でも、思春期が始まった時は、皆とお風呂に入りたくなかったものだ。

しかし、今日は素直に入ろうと思う。これも1つの恩返しだ。俺が何者かは知らないが、俺の親父は親父で、お袋はお袋だ。

第11話：稽古

風呂に入り、学校での生活や、昨日と今日の出来事を話した。親父は驚いていたが、今度地獄に行く時はわしも誘ってくれと言った。物好きもいたものだ。

「なあ親父。」

「何だ？」

「後で俺に稽古つけてくれないか？」

「どうした急に？」

「昨日も、今日も俺1人では全然齒が立たなかった。いつも守ってもらってばかりだ。だから…。」

「よし、分かった！教えてやろう。」

「ありがとう。」

お風呂から上がり、体を拭くと、ジャージに着替え、道場へと向かった。

道場では、組の人たちが様々な武術の練習をしていた。俺が入ると、

「組長！坊ちゃん！こんばんは！」

「おう！今から空を稽古つけるから、下がっている。」

「へいつ！」

俺と親父は道場の真ん中で向かい合わせに立った。

「わしに攻撃を当ててみる！」

「おう！」

俺は木刀を構えた。2秒深呼吸した後、体勢を低く保ち、親父の懐に飛び込んだ。

すかさず横払いをお見舞いしたが、親父は背後にいた。そして背中
中に衝撃が伝わった。

「がはっ！」

思いつ切り殴られた。あまりの衝撃に、呼吸困難を起こすかと思
ったほどだ。

「甘い！もっと素早く動け！」

「お…う。」

今度はジグザグに素早く動き、木刀を振るかに見せかけ、手放し
た。その瞬間に腕を後ろに引き、思いつ切り親父目掛けて繰り出し
た。しかし、親父は見抜いていた。親父は横に素早く動くと、俺の
腕を掴み、そのまま関節技をきめた。

「ギャーーーー！降参！」

「全然駄目だな。お前は今まで何を学んできた！鉄真！」

「へい！何でしょう？」

「ここにチャカ（拳銃）を持って来い！」

「え…しかし…。」

「いいから持って来い！」

「分かりました。」

部下の鉄真が拳銃を持ってくると、それを親父に渡した。親父はその拳銃を俺の方へ転がした。

「取れ！」

「！」

俺は言われたとおり手に取った。

「わしを撃て！」

「え…！でも…。」

「いいから撃て。心配するな！わしなら大丈夫だ。」

「うつ…。」

どうしよう。親父は逃げれるのか？いや、危ないだろう。もし当たれば…死！嫌だ、撃ちたくない。俺は強くなりたいが、親父を危険な目に遭わせるのは嫌だ！俺は、どうすればいいんだ！

……その答え、教えてやろう。体で感じるがよい！……

『我、武神の力を解放し、神武空へと憑依す！』

今、俺の意識ははっきりしている。

しかし、強い意思が俺を支配していた。しかも目は赤く、髪も燃え盛るような赤に変わっていた。

いきなりの変化に親父も部下の連中も理解できずにいた。

「空？」

「我は、空ではなく、ほんだわけのみこと誉田別命なり。そなた達は、八幡さんと呼んでいるようだがの。」

「その誉田別命様が一体どのような御用で？」

「我は、空に銃を使わなくても済むように稽古をつけに来た。さあ！空の父よ、構えよ！」

「は、はい！わしも本気でいかないと危ないな。」

誉田別命は、手を合わせたかと思うと、一瞬で親父の背後に回っていた。そして連撃。

「うっ！このわしが見えなかった。何という速さ。しかし、わしも

負けませぬ。」

親父も軽い身のこなしで、誉田別命の許へと向かい、回転蹴りを与える。誉田別命はニヤツと笑い、攻撃を交わしたかと思うと、股間に蹴りを一撃！

「がつ！」

親父は気絶した。部下が慌てて駆け寄り、部屋へと運んでいく。そして、部下のゲンがキレた。

「おい！ 誉田ボケか、知らねーけどよ！ 組長を卑怯な手で倒して満足か？」

「神に向かって、口の利き方には気を付けなさい。」

「何が神だよ！ お前は神武空だろうがよ！ 俺は、前からお前が気に入らなかったんだよ。ぬくぬくと育ちやがって！」

「ほお。私だけでなく、空まで愚弄するとはな。覚悟するんだな。」

「覚悟するのはテメーの方だよ！」

ゲンは、俺が落とした銃を持ち、銃口をこちらに向けた。

「じゃあな。次の組長は俺が頂くぜ。」

パン、パン、パン、パン、パン、パン。ドサツ。

俺は撃たれた。死ぬのか…。それとももう死んでいるのか…。

「呆気なかつたな。まあ、人間であつた証拠さ。」

「誰が呆気なかったって？」

部下は振向いた。そこには俺が立っていた！？

いや！撃たれた、確実に。だって血がない！どうなってるんだ？

「え！？お前まだ生きていたのか？確かに倒れたはず。」

「倒れただけさ。この血は幻想だ。その方が勝ったような気持ちになれるだろう？だが、お遊びも終わりだ！」

誉田別命は手を地面に付けると、神呪を唱えた。

『大地を創造せし神、土地に宿りし神、神武家を守護し神、この声を聞き届けたならば、目の前の罪深き人間を滅せよ！』

$\vdash \dots$

「な、何だ、何が起きている！？あわわわ…」

ゲンの足元が、一気に割れた。そして、すごい勢いで広がっていく。あまりの揺れのため、動きが鈍くなっているゲンは、その穴に落ちた。

そして、徐々に穴が塞がっていった。塞がってしまったら、何も変わらぬ道場へと戻っていた。そこへ、親父が現れた。

「さっきの地震は何だったんだ？空！大丈夫か？……もしかして、

誉田別命様が起こしたとか？」

「左様！そなたの、罪深い部下を始末しておいた。感謝するがよいで、大丈夫か？」

「はい、まだ少々痛みますが…。しかし！戦いにおいて、卑怯という文字は存在しませんので、私の完敗でございます。」

「よい心掛けじゃ。精進せよ。では、これからも空を頼むぞ！ただ、銃は使うな、危ないからな。さらば！」

俺は、先程起こった出来事を何度も反芻していた。これが神の力…。最強じゃん！！俺に怖いもんなんかないね。誰でもかかって来い！と思った時、誰かに頭を殴られた。

「痛ってー！」

……天狗になるんじゃない！もう助けぬぞ！……

「す、すいません…。」

神の祟りは怖いっていうからな。天狗にはならないでいよう！と変な決意をする俺であった。

明日からの予選はどうなるのやら。3人を選べって言われてもな。俺以外の人は、皆強いからな。まあなるようになるさ！

「空、お前なら大丈夫だ！自分を信じる！さあ飯を食ってさっさと寝ろ。」

父に激励を貰い、ワイワイと夕食を食べた。そして、明日からの

激戦に備えて、眠りについた。

第12話：受付

予選初日の朝。今日は一日晴れるらしい。思っていたよりも、良く寝ることが出来た。

しかし、緊張する！どんな強敵が来るのやら…。考えただけでもゾッとする。ま、俺は戦わないっていうのもありだが。

しかし、それでは親父の顔に泥を塗ることになる！それだけは避けよう。俺は朝ご飯を食べに、リビングの方へと足を運んだ。

ドアを開けると、

「坊ちゃん！お早うございます！今日は頑張ってください。応援に行くんぞ。」

そこには横断幕を掲げた部下たちが並んでいた。

「いやいやいや！来なくていいよ！予選だし。楽勝楽勝！」

「そうっすか！では、帰ってくるのを楽しみに待ってます！」

「お、おう。」

「空、朝ご飯早く食べなさいよ。カツ丼が冷めてしまっわよ。」

げっ！朝からカツ丼かよ…。そういえば昨日の晩もカツ丼だったような…。もしかして、3日間毎日カツ丼とか？まさか…。それはないよな？

「お…う。お袋ありがと。で、今日の晩御飯は？」

「もちろん！カツ丼よ！あなた好きでしょ？」

「マジかよ！？さすがに3食連続カツ丼はきついな…。」

「じゃあ、カツ飯（兵庫県加古川市の名物らしい。）にするわ！はい決まり！」

「……………」

部下たちの顔も親父の顔も苦笑い。俺の顔は呆れ顔。お袋は一旦こうと決めると、絶対譲らない。

「空、早く食べなさい。遅れるぞ。」

「今何時？…やべ！時間がない！頂きます！」

俺は慌てて食事を済ませ、制服に着替えた。丁度用意が出来た時、外がうるさくなった。

ババババババババババババババババババ…。

「うるせー！何だよ！」

「空、ヘリが来たぞ！」

「え？何て？よく聞えない。」

「早く乗りなさい。」

「お、おう！じゃあ、行つて来る。」

俺は、ヘリへと乗り込んだ。部屋の中から父親とお袋が見送っている。

「大袈裟だな……………サンキュー。」

こうして会場の神戸へと発進した。

ヘリの中は意外と快適だった。俺は、誰を出場させるか考えていた。やっぱ俺は出なきゃいけないよな…。いや！女子3人に任せよう。お手並み拝見ということだ。

30分ほどすると会場が見えてきた。上から見るだけでもかなりの車が来ていた。しかも、そこから降りてくるのは、俺と同じ筋のような人が多い。

会場の隅にあるヘリポートにヘリを着陸させ、降りると運転手に礼を言い、会場の方へ駆け出した。

会場前に着くと、沢山の人がいた。これじゃあ、皆を探すのは大変だなと思った時、アナウンスが流れた。

「大会にお越しの方々に連絡致します。各高校の生徒会長は、受付を行ってください。受付は会場入り口の方で行っております。繰り返し…。」

俺は受付へと行った。受付では既に行列が出来ていた。その最後尾に並び、待っていると、

「いたいた！会長ー！」

この声はあいつしかいないよな。横を見ると、樹が右手を振っていた。左手にはソフトクリームが…。

周りも場違いな樹を品定めするように見ている。しかし樹は気にしない。樹の隣には他の生徒会員がいた。何処かで待ち合わせしていたんだろうか？でも俺には何も…。

しょぼくれている内に、俺の番が回ってきた。俺は氏名と学校名を書いたが、緊張してたために、字がガタガタになってしまった。後ろで見ていた奴に、

「何だよ！緊張してんのか？ここは、お子様の来るところじゃないぜ！早く帰れば？ハハハハ！」

「う…うるせー。黙ってる！」

「お！威勢がいいな。こりゃ楽しみだ！」

「会長を悪く言うな！」×4

「あん？誰だテメーは？」

「私達は、会長と同じ青龍高校の生徒会員です。」

「アハハ。女の子かよ！お前らの試合が本当に楽しみだぜ。俺は慧陵高校の白立 皇だ。じゃあな。」

そう言つと、皇は仲間の許へと向かった。

「何あれ！もう嫌になっちゃう！会長もズバツと言いなさいよ！」

「すいません…。」

なぜ俺は謝っているんだ？それより強そうだったな、さっきの奴。
本当に勝てるのだろうか？

第13話：楽しく?ゲーム

受付が終了すると、開会式が行われるスタジアムへと移動した。そして、自分の高校名が記されたプラカードの前に並んだ。

開会式が行われたが、俺はあまりの緊張のため全く聞いていなかった。

創が言うには、白目を向いていたとか…。

確かに、全然覚えていない…。しかし気づいていたのは創だけのようだ。

すると、女子4人組が、

「会長！白目向いていましたけど大丈夫ですか？」

「えっ！…何のこと？さっぱり分からないな。」

「誤魔化しても駄目ですよ。私たちずっと会長の方を見ていましたから！」

「……。すみません、以後気をつけます。」

「分かれば宜しい。」

とほほ……。まるで立場が逆ではないか。

そんなことを考えながら、一同は控え室へと足を運んだ。

控え室は1校に1部屋ずつ用意されている。部屋は広く、冷蔵庫、

洗濯機、ソファー、そして50インチのテレビなど、十分すぎるくらいに設備が整っている。

部屋に入るとすぐに、樹はテレビを点けた。そこには、この会場で行われる試合が、生中継で放送されていた。

試合は、スタジアムの中央に設置されているガラス張りのドーム（天井は開いている。）で行われるようだ。

出場するのは3名。俺たちの試合は、今日の最後。といっても予選だけだが…。

今試合中なのは…慧陵高校！白立皇がいる高校か！

「どれどれ、お手並み拝見…。ん！？」

始まって5秒で慧陵高校の代表しか立っていなかった。他の選手は…倒れている。まさか、死んでしまったのか？

審判が中に入り、確かめている。この大会のルールでは、殺害した場合、即刻失格となる。つまり、この人たちが死んでいたら、慧陵高校は失格となる。

樹は、

「失格！失格！」

と叫んでいる。

審判が旗を揚げた。その色は…白色！つまり、失格ではないようだ。

樹は、この世の終わりのような表情をしていた。俺は内心ホツとしていた。

「良かった。」

「何ですって？」

樹に思いつきり睨まれた。怖い怖い。

「な、何でもない。残念だなと思って…。」

「そう…。それならいいけど。」

他の試合を見ると、樹の表情が余計に悪化しそうなので、違うことをしよう。

何かないかな？おっ！テレビの下にゲームがある。どれどれ？

「任天堂64に……。それだけ！？しかも、ソフトはマリオカートのみ…。まあいいか。」

ということで、自分たちの出番が来るまで、マリオカートでもすることにした。

じゃんけんで、初めは俺と美貴、創、晴香がすることになった。そして、ビリの人が次の人と交代する。

しかし、マリオカートをする時に、喧嘩になるのがプレイヤーを決める時だろう。やはり、もめた。誰がクッパを使うかで…。

いや！そこは女の子らしくピーチとかピノキオを選ぶべきだろ！

じゃんけんの結果、クツパは晴香に決定。美貴は悩んでいたが、ワリオにしたようだ。悪キヤラが人気のようだ。創は…ピノキオ。まあ走りやすさで選んだのだろう。

「ピノキオ可愛いよな！なっ、会長。」

「……もしかして、それで選んだ？」

「もちろん！」

俺が馬鹿だった。さて俺は、何にしようか…。えー！？何で勝手に決められているんだ？

「会長、遅いからピーチにしておいたよ。」

「なぜピーチ？ドンキーとかマリオとかあるだろ？」

「だって…ピーチっぽいから。」

「……………」

俺は言葉も出ない。どこがピーチなんだ？顔か？体か？考え方が…とにかく、勝って見返してやる。

3分後。

「俺だけゴールしていないとは……情けない。」

3人とも腕はプロ級で、裏技の連発。俺は、バナナですべたり、

池に落ちたりでボロボロ。裏技を使おうと頑張ったが、壁に激突。仕方なく、健と交代した。

「会長！僕が敵を取ります。」

3分後。

「会長ー！あの人たちは化け物ですよ。僕にばかり甲羅を…。もしかして僕って嫌われているのですか？」

「そんなことないよ。たまたまさ！ほら、ゲームだし。」

「そうですね！良かった。」

次の挑戦者は樹だ。樹は左手にソフトクリームを持ちながら、コントローラーを受け取った。

「おいおい、片手ではできないだろ。」

「大丈夫だよ。ほら。」

俺は呆然となった。樹は、コントローラーを足の指で操作するようだ。ハンデのつもりなのか？ていうか、勝負よりもソフトクリームを取るのか！？やはり、食えない子だ。

3分後。

「会長ー！あの人たち怖い！」

樹はそう言いながら、俺に抱きついた。俺は抱きつかれたことよりも、樹が負けたことにびっくりした。

それもそうだろう？ 自信满满で、しかも足でするとなると、かなりの腕前だと思っていたのに…… 結果は惨敗。

期待した俺が馬鹿だった。そんなことを考えていると、すごい殺気が俺を襲った。

「な、何だ！？」

殺気の出所は、もちろん樹を除く女子3人である。

「樹ちゃん！ 何しているの？？」

「ほえ？ 何しているって…… 見て分からない？ 会長に抱きついていていの！」

「今すぐ会長から離れなさい！ さもないと…… 殺す！」

一瞬、俺がマジで殺されるかと思った。

「殺せるものなら殺してみなさいよ。」

樹は手に持っているソフトクリームをゴミ箱に投げ捨て、大太刀を右手で持ち上げた。もちろん左手は、まだ俺の体に巻ききついている。

「いい度胸ね。後で後悔しても知らないから。」

茜と美貴と晴香はそれぞれ自分の武器を手にした。

やばい！あいつら本気だ。何とかしないと！とは思うが、心の片隅では、ゲームの結果は？と思っっている俺であった。

「ちよつ、ちよつと待て！話せば分かる。だから、落ち着け！なっ？樹も俺から離れる。気持ちは嬉しいが、お前が殺されると大事な戦力が無くなるからな。」

「……。会長！」

「うげえ！く、苦し、い。」

樹は首にしがみついた。ということは…。

「！！！！。樹覚悟！」

もう駄目だ。俺は幸せなのか？不幸なのか？

「もうその辺で止めとけ。」

止めたのは創だった。ありがとう、創。やはりお前は俺の見方なんだな。と、感心していると、

「いつまでも喧嘩していると、ゲームの続きが出来ないだろ？」

「……。はい？もう一回言ってくれ。」

「だから、俺のゲームの腕前を見せ付けることが出来ないだろ？」

やはり、俺は馬鹿だ。自分が馬鹿だと思ったのは、今日何回目だ

ろっつ？ 3回目かな？

第13話：楽しく?ゲーム(後書き)

皆さん、お久しぶりです。パソコンが壊れたため、作業が出来なくなり遅くなりました。感想を下さった方有難うございます。これからも頑張ります。

第14話：太ったハンサム

その時、ドアがノックされた。

ドアを開けると、男の人が立っていた。その人は、黒のスーツを着ており、体型は太め。しかも顔には多数の青痣が目立つ。

「どちら様でしょうか？」

「私、このスタジオの部屋を管理しております、ハンサムと申します。」

ハンサムと名乗る男は、なぜか身構えた。

「……。はあ、ハンサムさん…ね。」

「どうしたんですか？」

「嬉しい！私をハンサムと言ってくれたのは、あなた様が初めてです。今まで挨拶に行った部屋では、殴られるわ、蹴られるわで至る所が痛くて…。」

「…そうだったんですか。で、御用は何ですか？」

「あっ！そうそう。この部屋にゲームがあることはご存知ですか？」

「64のことですか？」

「そうです！そうです！もしかして、もう体験済みとか？」

「えーやりましたけど…駄目でしたか？」

「そんな、滅相もない！むしろ嬉しいぐらいです。私の1番のおすすめですから！」

「マリオカートがですか？」

「…もしかして、WiiとかPSS2とかだったら良かったのと思いました？」

「そりゃね…。」

「あなた！それでもゲームマニアですか！？マリオカートの良さはですね…。」

俺は、この人の話が長引くと直感し、ドアを閉めた。ついでに鍵も。

ハンサムはドアの外で何かを叫んでいるが、無視をしよう。俺がゲームマニアだって？笑わせる。俺はその次元を越して、ゲームを××だと思っているのさ！！××は皆さんのご想像にお任せするとうとう。

俺はゲームの続きをするため、というより、何としても勝つため、皆の許へと戻ろうとした。

しかし、再びドアがノックされた。またハンサムかと思い、

「どちら様ですか？」

と聞いたところ、大会の役員だと返事が返ってきた。

ドアを開けると、黒のスーツを着た人相の悪い男性が立っていた。

「青龍高校の皆様、予選が行われますので、中央ドームへお集まり下さい。」

「あつ、はい分かりました。」

俺は、皆を呼び、ドアを閉めた。そして、行こうとした時、

「あつ！出てきた。あなた！急にドアを閉めるなんて失礼ですよ！マリオカートの良さはですね…。」

「……樹頼む。」

「はいはい！」

樹は手に持った太太刀をバットのように構え、思いっきり振った。鈍い音を立て、ハンサムの体は廊下の奥へと飛ばされていった。

「ナイスショット！」

「えへへ。すつきりした。また来ないかな？」

「いや、もう来ないだろう。たぶん…。」

「早く行かないと遅れるぞ。」

創が、急かしたが、特に焦った様子はない。いつでもマイペース

が1番だということだ。

しかし、創の内心では焦っていた。そのことに気づいていない俺だった。俺が1番マイペースなのかも…。

「そうだな、行こうか。」

俺たちは、予選を戦うために中央ドームへと歩きだした。

そして、エレベーターに乗ろうとしたが、俺が乗った瞬間、ビーという警報が鳴った。

何かの間違いだと思い、もう1度乗ってみても、結果は同じ。今度は爪先立ちでやってみたが、やはり同じ。

すると、樹が、

「爪先立ちも、座って乗っても、体重は変わらないのに。」

と嫌味を放つ。

「俺は階段で行くとするよ。」

「では、僕もお供します。」

「じゃあ私も。」（樹以外の女子。）

「……分かったわよ。私も階段で行くわよ。」

すると、創は、

「じゃあ俺はエレベーターで先に行ってるぜ。」

そう言つと、閉のボタンを押し、さっさと行つてしまった。

「……………」。(全員)

最初に口を開いたのは、健だった。

「同じ男として許せませんね！後で、地獄を見せてあげることになりました。」

健が怖い。しかもニコニコしながら言うから、余計に怖い。

「ま、まあいいじゃないか。それよりも早く降りよう。」

俺たちは、5階から階段を駆け下りて行つた。下りるのは楽だが、上ることを考えるとぞつとする。

下に着くと、創が涼しそうな顔で座っていた。

「皆遅かったね。一睡できそうだったよ。」

「創さん、後で一緒に閻魔大王様のところに行きましょう。その舌を抜いてもらいにね。」

「……………」。そ、それだけは勘弁してくれ！地獄だけはもう沢山だ！すまない、調子に乗っていた。」

「……………」仕方がありませんね。今回だけですよ。」

健恐るべし！！健が会長だったらどうなるのやら。少しだけ見て

みたい。

しかし、創は元々こんな性格だったわけ？もっとクールだったと思うけど…。

第14話：太ったハンサム（後書き）

どうもこんにちわ。感想を書いて下さった方有難うございます！
自信とやる気がグーンとアップしました。

もしよろしければ、今後こんな展開は？こんな人物を出して欲しいなどの意見をお書き下さい。できる限り反映させたいと思っています。

宜しくお願いします。

第15話：予選

中央ドームに到着すると、すでに他校の生徒は集まっていた。俺たちはギリギリだったようだ。

「では、揃ったところで説明をします。まず、代表3名を決めていただきます。続いて、このドームの中に入り、戦ってもらいます。時間は無制限。もちろん、殺してはいけません。そして、生き残った高校が準決勝へと駒を進めることができます。すでに、慧陵高校、普賢高校、清流高校の3校が準決勝出場を決めています。ぜひ、頑張ってください。あつそれと、このドームはかなり固く作られておりますので、ご安心を。ただし、上が開いていますので、上に向けてミサイルは飛ばさないで下さい。以上です。」

俺は、出場する3人を選んだ。

反省中の創、影の薄い美貴、そして小柄な悪魔の樹。3人は他校の選手と一緒にドームへと入っていった。

えっ？なぜ俺が出ないのかって？そりゃ決まっているだろ…怖いからだよ！このことは誰にも言うなよ！

会長の俺が臆病者だってことが知られたら、モテ期が遠のいてしまっからな！心配しなくても決勝戦では出てあげるから。たぶん…、約束はできないけど。

一方、ドームの中ではもの凄い殺気で溢れていた。

殺気が出ていないのは俺の高校だけ。何やら他の選手たちがこそそと話をしている。

またどうせ、トイレに行き忘れたとか言っているのだろうと創は考えていた。

しかし、その考えが間違っていたことを思い知らされることになる。

審判は、身の危険があるため、ドームの外から合図を送る。

「用意はいいですか？……………。いいみたいです。それでは、予選第4回戦開始！」

他校の選手は一斉に俺の高校を目指していた。それもそのはず。女子が2人もいるから。しかし、俺は計算済み…だと思う。

12名の選手が樹と美貴に迫った時、創が動いた。

「まさか、打ち合わせをしていたなんて。しかし、女子には指一本触れさせないぜ！」

「創君……、邪魔！私の獲物を取らないで！」

樹は自分の大太刀でつい、創を殴ってしまった。

「がつ！」

創は頭から血を流しながら倒れた。これで失格にならないといけないが…。

樹はそんなこと構いなしに向かってくる敵を、ねじ伏せた。

美貴は創には最初から興味がないような様子で、樹のサポートをしている。

飛び道具を持っている者から確実に仕留める。でかいマシンガンで。武器が武器だけに、決着が付くのは時間の問題かと思われた。

しかし、1人だけ、弾をかわしている人物がいた。

「なぜ当たらないの？」

「教えてあげようか？ねえ？ねえ？でもやっぱり秘密！」

「…うざい。しかもオカマっばい。」

樹と美貴がつっこんだ。

「何ですって？もう1度言ってみなさい。」

「だからうざいって言うてるのよ！黙りなさい、オカマ！！！」

「は、はい。参りました……あつ、しまった！」

この大会では降参の言葉を発した場合でも負けとなる。

「い、今のなし！私はまだ負けていないわ！！！」

「実に残念ですが、ルール上例外を認めるわけにはいきませんので。」

という審判の意見。

「そ、そんな。私の夢が…。」

「只今の試合により、勝者、青龍高校準決勝進出です。」

か、勝った。ま、当たり前だけどな。一瞬だけヤバいと思ったけ

ど…。

「な、健……？」

「う、うくつ、あひつ、げほ、ごっほごほ！」

「だ、大丈夫か？…泣いてるのか？」

「す、すみま、せん。つい、うれ、しくて。」

まるで父親みたいだな。まあ健の好いところでもあるけど。そう言えば、創はどうなった？

「創は？」

「創なら大丈夫だよ。ほら。」

創は担架に乘せられていた。全然大丈夫じゃねーじゃん！

「ねっ、大丈夫でしょ。」

樹はやはり小柄な悪魔だ。怪我をさせたのはお前のせいである事に気付いているのか？

しかも、本日3本目のソフトクリームを食べているし…。どこから持ってきた？試合中は持っていなかっただろ？

「そのソフトクリームは？」

「あつ、これ？これはね、茜ちゃんに持っていてもらったんだ。でも少し溶けちゃった…。」

「当たり前だろ！」

「しかも、3本目となると、さすがにホツとするね。だから、これあげる！あたしの食べかけ。食べかけだよ、食・べ・か・け！」

「…………。じゃあ遠慮なく貰うよ。」

「はい！」

「どうも…………。」

俺は、樹から食べかけのソフトクリームを貰った。

男心としては嬉しいが、他の女子の目が気になる。しかし、運の女神は俺に味方をしているようだ。

女子たちは、創のそばに集まっている。よし、これなら！

「頂きま…………。んん！！！」

ソフトクリームに手裏剣が刺さった。もしやこの手裏剣は…。

「何をしているのですか？」

茜だ！あれ？さっきは向こうを向いてたはず。どうして…？

「会長のことはすべてお見通しですよ。」

茜、恐るべき。

「もう！もう少しだったのに…！」

「残念だったわね。こうすればいいのに。」

そう言つと、茜は俺の首に腕を回し、顔を近づけてきた。
もしか、これは！しかし、うまいくかないのが人生である。

「茜覚悟！！！」

樹の殺気に気付いた美貴と晴香も加わり、茜めがけて色々なものを投げた。岩、大太刀、審判まで。

茜は殺気に気付くと、軽く避けた。ん？避けたってことは…。ゴン、ドン、ドス。俺にクリティカルヒット！！俺は気絶した。

第16話：準決勝 第1試合

目が覚めると、俺はベッドの上だった。ここはどこだろう？匂いからして医務室かな？ふと横を見ると、健と創を除く皆がいた。

「会長！気が付いたのですね！」

「ああ…。俺はどのくらい寝てた？」

「5時間くらいです。」

「皆はその間ずっとここに？」

「そんな訳無いじゃない！部屋でゲー、もぐ、うぐ。」

美貴は、樹の口を塞いだ。

「はい、ずっとここにおりました。」

何か怪しい。ゲーとか聞こえたぞ。もしか…。

「ゲームは楽しかったか？」

「うん！樹はずっと1番だった…なんだよ。」

「へえ、そうなんだ。俺が気絶している間にゲームをしていたとはね…。」

そのことについて美貴が説明した。

「会長、ゲームをしていたのは樹だけです。私と晴香は明日の説明会に、茜と健君は創君の傍についておりました。樹だけが会長のお傍にいたのです。」

「てことは、樹は誰も居なくなってから部屋に戻り、ゲームをしていたということか？」

「はい、そういうことです。せつかく会長の傍に居れるというのに……。」

「そうよ！私だって居たかったのに！じゃんけんに負けたから……。」

「僕だってそうですよ！！会長を思う気持ちは皆一緒です！ねっ、創さん？」

「いや、別に……。」

「ねっ、は・じ・め・さ・ん??」

「お、おう。」

「言わされたと思うのは俺だけ？」

「創、もう大丈夫なのか？」

「ああ、まだ腹がズキズキ痛むけどな。誰かさんのせいで……。」

「創は、樹の顔を見た。」

「何？私の顔がそんなに魅力的？でも創君はダメ！私には心に決めた人がいるんだから！」

「会長のことか？」

「ブッブー。」

「え！？」×6

たぶん一番俺が驚いているだろう。なぜなら、1度告白されているのだから。

もしかして、俺が気絶している時も、俺に興味が無くなったからゲームをしに？

「じゃ、じゃあ誰なんだ？」

俺は恐る恐る聞いた。でも、何だ？このもやもやした気持ち…。

「私の好きな人は……。」

「くっ。」

「それは……白立皇くんです。きゃー恥ずかしい。」

「白立…皇……。ってあの白立皇か…！」

「そう！もっかつこ良過ぎ…！」

「でも、予選の時に俺にソフトクリームをくれたじゃないか。」

「あれはあれ、これはこれよ。」

なんだそりゃ？まあ好きになる人はそれだけけど…なんか悲しい。

はっ！もしかして、モチ期が衰退しているんじゃない！

俺がこんなことを考えていると、晴香、茜、美貴の3人はガッツポーズをしていた。まるで、ライバルが減って喜んでるように…。しかし、いつまでも悩んでいても仕方が無い。明日からのことを考えよう…少し難しいが。

「そういえば、説明会に行ったんだよね？どんな説明があつた？」

「えーとですね。くじ引きの結果、慧陵高校vs普賢高校、清流高校vs青龍高校に決まりました。あと、追加ルールとして、準決勝からは死者が出てOKだそうです。」

「へえー。」

いつもの俺だったら、死にたくない！などと思うが、今はそれどころではない。

かと言って、樹が本命ではないのだが…。一体誰だと思う？それは…秘密。いつか教える時が来るかも。来ないかも知れないけど…。

まあ何事も気にせず寝ることにしよう。5時間も寝たのだが、まだまだ寝れる。

「俺もう寝るわ！お休み。」

「は、はい、お休みなさい…。では、私たちはご飯を食べることにしましょうか。」

「賛成！もうお腹ぺコぺコ。」×5

俺は本日最大級の失敗したことに今は気付いていない。

翌朝午前7時。皆が起こしに来たことで目が覚めた。

「会長、遅ーい！ーもうすぐで、皇さんの試合が始まっちゃうよー」
「！」

「しかし変ですね。昨日沢山寝たのでは？」

「いや…それが…。実は夜中にお腹が空き過ぎて寝れなかったんだ
…。」

「あははははっ！だっせー！」

この声は！もしや…。

「白立皇！何しに来た！」

「俺はただそのハニーを呼びに来ただけさ。俺様の勇姿をその綺麗な瞳に焼き付けてもらうために。」

相変わらず、キザな奴だぜ。俺はまた、こいつに恥ずかしいところを見られてしまったのか。恥ずかしいという気持ちしか湧いてこない。

「皇さーん！わざわざ来てくれたの？樹嬉しい〜。」

「さっ、行こうぜ、マイハニー。」

「レッツゴウ！」

キャンプに行くんかい！って思わずつつこみそうになったが、止めた。

今度恥ずかしい場面を見られたら、立ち直れなくなりそうだから。

「じゃあ俺たちも行こうぜ、あいつの勇姿とやらを見物に。」

俺たちはスタジアムの観客席へと移動した。

すでに、2校の選手は揃っていた。今回の対戦も3人だ。しかし、1人ずつ戦う。

慧陵高校のトップバッターは、かなり大きな体をしていた。対する普賢高校のトップバッターは……！？普賢高校の選手は皆お遍路さんの様な格好をしていた。これでは特徴が分からない。

その時、各校の選手の名前が呼ばれた。

「慧陵高校代表、ゴンザレス。普賢高校代表、お遍路さん2号。」

そのままじゃねーか……！てか、ニックネームで良いのかよ。それだったら俺も……やっぱりやめた。名前を考えただけで恥ずかしくなる。

「それでは、試合開始！」

合図が発せられても、2人は動かなかった。相手の様子を伺っているのだろう。

先に動いたのは、ゴンザレスだった。

ゴンザレスは、体格の割に素早かった。あっという間に2号に詰め寄ると、大きな拳を叩きつけた。

2号はかわさなかった。しかし、当たってもいない。どういうことだ？

何やら見えない壁に阻まれているようだ。

その時、2号が笑った。そして、ゴンザレスを殴った。2号の体格からして、力は強そうには見えないが、ゴンザレスを吹っ飛ばした。

ゴンザレスは起き上がり、悔しそうに地団太を踏んだ。

「よくもやったな！許さない！！」

ゴンザレスは、右腕を後ろに引き、力を集中させた。そして、渾身の突進パンチ。

「くらえ！必殺、スクリュウパンチ！」

ボキッという鈍い音が響いた。ゴンザレスは、泡を吹きながら倒れた。

どうやら、右手、右腕が折れたようだ。そのショックに倒れたと考えられる。

一体なんだ？あの見えない壁は。まさか！妖術使い！こんなこと思いたくないが、慧陵高校が勝って欲しいとちよっぴり思った。

第17話：流行語？

続く2回戦は、チビvsチビだった。

何とも言えない組み合わせ。俺の相手があの子達だったらなと思
いながら見つめる。

「慧陵高校代表、チビ輔。普賢高校代表、お遍路さん3号。」

またまたそのまま…。しかし、早くも慣れてきた。頑張れ、チビ
輔。妖術使いは負ける。と心の中で応援する。

「それでは試合開始。」

2人は、さっきの試合とは違い、積極的だった。

チビ輔は、ラ、ラジコン？？確かに、手にはコントローラーを持
っている。

そのラジコンは、飛行機のラジコンだった。

つまり、積極的に動いていたのは、ラジコンだったのだ。操縦者
は一步も動かない。

対する、3号は、走りながら念仏を唱えている。除霊でもしてい
るのだろうか？

突然、3号が立ち止まり、ニヤリと笑った。もしか！走ってい
たのは、逃げていたから？？という疑惑が浮上した。どうでも良い
が。

3号は、右手を天高く上げ、
「雷神召喚!!」

と叫んだ。

すると、雲が集まってきた。そして、チビ輔を襲った。

雷というのは、人1人を殺すのは簡単なくらい強い電力を持っている。

さすがに、生きていないだろうと誰もが思った。もちろん本人でさえも。

しかし、チビ輔は生きていた。会場は奇跡の生還に拍手を送った。しかし、なぜ？奇跡？精神力？普段の行い？と意味も無く考える。

「そうか!」

俺の声に皆の注目が集まった。

「会長、分かったのですか?」

「いや、まあ…たぶん。」

「なぜ、生きているのですか?」

と晴香が問う。

「多分だけど、コントローラーのおかげじゃないかな?電気が分散されるから。」

「なるほど！！会長、頭いい。」

「いや、それ程でもあるかな。」

俺の言ったとおり、コントローラーが助けてくれたようだ。チビ輔がコントローラーに感謝を言っていた。3号は悔しそうだっただが…。

しかし、もう一度落雷させるため、呪文を唱え始めた。走りながら。

チビ輔もラジコンで追いかけるが、上手く当たらない。当たったところで、大した怪我にはならないだろうけど。そんな間に、呪文が完成してしまっただけ。

チビ輔ピンチ！！絶体絶命！！3号は高らかに笑う。そして、右手を上げた。

ぱしゅっ！！

空気が裂かれたような音…。

「あれ??」

言葉を発したのは、3号だった。それが、3号の発した最後の言葉である。

3号は、上半身と下半身が分かれていた。つまり…切断された??？もしかして……ラジコン??ラジコンの羽を見ると、赤く染まっていた。

「ゲッ…マジ!？」

俺の声は裏返っていた。

「……。」

皆は俺の出した声にビックリしていた。

すると、晴香が、

「昔、おじい様に扇風機の羽を触るな!と怒られたことがあります。指が飛ぶからと…。もしかして、その原理を使ったのでは?」

「そうだよ、きっと。晴香、頭良い!!」

「それ程でもあります。」

それ、さっき俺が言った言葉。もしかして、今年の流行語大賞取れるかも。などと本気で悩んでいる俺であった。

第18話：皇の意地

いよいよ、樹がべた惚れしている皇の番だ。さて、お手並み拝見といきましょう。

「慧陵高校代表、白立皇。普賢高校代表、お遍路さん1号。」

1号ってことは、生徒会長か？しかし、生徒会長と言うより、入院患者である。

色白で細く、ブルブル震えている。こりゃ、楽勝かも…。何だか悔しい。

「それでは、試合開始。」

それは、一瞬の出来事だった。皇は、相手に一閃。1号は、倒れた。

「勝者慧陵…ん!？」

審判が見つめる先には、1号が立っている。斬られていなかったのか？

しかし、皇は不思議そうな顔をしている。

すかさず、一閃!!しかし、今度は倒れない。

パキッ!パキパキパキパキ。

「そんな馬鹿な…。俺の刀が折れるなんて…。」

「弱い…刀です…ね。」

相変わらず1号は震えている。

「貴様！何をした！」

「私は…何…も。」

「じゃあさっき倒れたのはなぜだ！」

「演出…です。盛り…上がると…思っで。」

「くそっ！」

皇は、もう1本の刀を抜き、目に見えないくらいのスピードで斬りつけた？いや！斬れていない。体で受け止めている…。

パキッ！パキパキパキ。

もう1本の刀も折れてしまった。皇にはもう刀が無い。

「もう…終わりですか？」

「刀を失った俺にできることは、拳でのみ！」

皇は、1号の懷に飛び込み、連続パンチをお見舞いした。

ボキッ！

「ぐあー！！！」

刀でさえ通用しないのに、拳が通用するわけもなかった。

「しかし、負けるわけには…。負けるわけにはいかないんだ…！」

皇は、砕けた拳を握り締め、1号の顔面へと打ち込んだ。

「ぐえ…！」

ドスン。誰かの倒れる音…。立っているのは…。

「勝者、慧陵高校。決勝進出…！」

皇が勝った。1号は…のびている。どうやら、顔面は弱いようだ。皇は、担架で運ばれている。

「皇さ…ん…！大丈夫？」

「マイ…ハニー…。どう…だった？俺は…カッコ良かったか？」

「うん！カッコ良かったよ。」

「これ…から、俺の…傍に…居てくれるか？」

「……………」

樹は、俺の方を見た。

「居てやれ。俺たちなら大丈夫だから。」

「……………分かった。」

そう言つと、樹は、医務室の方へと消えた。

第19話：四字熟語

さて、次は俺たちの番だ。

「皆、気合入れて行くぞ！」

「おゝ。」×6

何とまあ、気の抜ける返事だろう。しかし、これの方が良いのかも知れない。

「今回の試合は、晴香、茜、健に出てもらおう。意見ある人は？」

「無いです。」×5

「それでは、代表者はこちらへお越し下さい。」

審判の指示により、3人はドームの方へと歩いていく。

どうか死なないでくれと祈るしかない。

じゃあお前が出るよ！と思うかもしれない。しかし、俺はまだ死にたくない！！

「準決勝、第1試合。青龍高校代表、朝倉晴香。清流高校代表、美辞麗句。」

あれ？美辞麗句って人の名前？四字熟語のような気もするが…。

「それでは、試合開始。」

美辞麗句は、懷から赤い薔薇を取り出した。

「私は美しい、この薔薇のように。そしてあなたは汚らしい。」

「……。」

「私は強い、男だから。あなたは弱い、女だから。」

「……。」

「私はモテる。あなたはモテない。」

「……。」

「私は会長に好かれている。あなたは好かれていない。」

晴香は、美辞麗句の両足に手裏剣を突き刺した。

「な、何てこと！？私の美しい足が……。血で…血で…真っ赤…。
私、血はダメ…。」

美辞麗句は失神してしまった。

「残念だったわね。あなた、弱すぎ。それと、会長は私のことが好きで好きで、仕方が無いのよ。ねっ、会長？」

「……あっ、ああ。…！！」

凄い殺気を感じる。もしかして…やっぱり。

美貴と茜がこちらを見ている。というか睨んでいる。

「皆同じくらい好きだよ。」

2人の顔が輝いた。その反対に晴香の顔に影が…。
どうして女子はこんなに難しいのだろう。

「続いて、第2回戦。青龍高校代表、源茜。清流高校代表、明鏡止水。」

また変な名前…。

「それでは、試合開始。」

「私は、水のように綺麗。私は、世界で2番目に美しい。」

じゃあ1番は誰なんだ？ つい、突っ込みたくなる。

「1番は会長。」

聞こえていたのか？ いや、俺は口に出していない。

「私は、人の心が読める。それは、私が美しいから。」

関係ねーだろ。

「関係はある。」

だから、人の心を読むな。

「それは、出来ない。なぜなら、私はあなたに恋をしてしまったのだから…。」

えっ！？俺に？君は男だよね？

「もちろん。証拠を見せようか？」

すると、明鏡止水はズボンを脱ごうとした。

いやいや脱がなくていい。

「そうか…残念だ。」

1つ言っておく。俺は君に興味は無い。

「な、何だって！？こんな美しいのに…。」

「あの、1つ聞いても良いですか？」

と茜。

「何？」

「一体誰と話しているのですか？なんか、独り言を言っているみたいだし…。」

「私は、あなたの会長と会話をしていたの。」

「会長と？」

「会長は、私に夢中。あなたには絶望。」

ブチッ！！

何かそういった音が聞こえた気がした。

「茜流奥義、猛狐奮迅！！」

茜は、両手に5枚ずつ手裏剣を持ち、一気に放った。

手裏剣は意思を持っているかのように、明鏡止水へと襲い掛かる。まるで、狐が獲物を狩るように。

「うっ、痛い、青龍高校の会長！痛い。」

「それ以上会長に話しかけるな！。茜流奥義、猛狐奮迅！」

「同じ技は効かないわ。」

明鏡止水は、茜の奥義を避けた。

「次はこちらの番ね。止水流奥義、清廉潔白！」

明鏡止水は、手に持っているペットボトルの蓋を開け、水を口に含み、一気に吹きかけた。

「何これ？うっ、痛い、痛い。ああー。」

「これは、ただの水じゃないのよ。これは硫酸。」

「じゃあ…何であな…たは大丈夫…夫なのよ。」

「私は訓練を受けているから。」

「ぐっ。」

「もうそろそろ、終わりね。」

「明鏡止水、止める。茜の負けでいい。だから、助けてやってくれ！」

「あらあら、会長さんは優しいのね。そういうところ好きよ。でもね、これは試合。まあ、棄権してくれるなら、考えても良いわ。」

うつ。棄権…。しかし、皆の夢が…。

「会長、ごめんなさい。私…私…。」

「茜、俺は試合よりもお前の方が大事だ。だから負けを認める。そのまま続けたら取り返しがつかないぞ。」

「うん…分かった。私の…負けです。」

「それで、済むと思ってる？残念、死んで頂戴。」

第20話：必殺！衛星射撃

何だと！！茜は負けを認めたじゃないか。審判も焦っている。

「明鏡止水選手、試合は終わりました。こちらへ！」

「嫌だね。誰があんたの言うことなんか、聞くか。じゃあね、茜ちゃん。バイバイ。」

俺たちは、明鏡止水を止めるため、走った。しかし、間に合わない。

『汝、我の体に降臨せよ、日本武尊！』

この声は、健か！？

「日本武尊が命ずる！縛、縛、金縛！」

「な、何だ？体が動かない…。どうなっている。」

「茜とやら、危なかったな。救護班、急げ。」

「は、はい。」

茜は担架に乘せられ、運ばれていった。

「美貴、茜を頼む。」

「分かりました。」

美貴は、茜の後を追った。

「くそー！お前は誰だ！！」

「私は、日本武尊。残念だったな。」

「明鏡止水、お前は最低な人間だ。」

と俺は言っただった。

「これは、空様。お久しぶりです。」

「有難う御座いました。」

「いえいえ。それでは。」

そう言つと、いつもの健に戻った。明鏡止水は、強面の人たちに連れて行かれた。

「只今の勝負、清流高校のルール違反により、青龍高校の勝利。よつて、青龍高校決勝進出。」

今日の試合はもう無いので、部屋でゆっくり休むことにした。

大会3日目。まるで、全国大会の決勝に来たような気持ちだ。正直ドキドキしている。足はブルブル…。

「皇…。大丈夫なのか？」

「ああ、完全復活した。お前と戦うために。」

「そうか。ってええー！！俺と戦う???冗談はよしてくれよ。」

「なぜだ?」

「なぜって…。そうそう！俺昨日から、腹の調子が悪くて。」

「へえー。じゃあ、なぜソフトクリームは食べれるんだ?」

「あつ…。分かったよ。出ればいいんだろ?」

「そうだ、出ればいいんだよ。」

皇の奴…覚えとけよ。絶対……………多分倒すからな!!

決勝戦は、俺、健、創の男3人組でいくことにした。まずは、3将の創から。

「只今から、決勝を行います。勝ったチームが全国大会へのチケットを手に入れることができます。はたして、青龍高校と慧陵高校のどちらが勝つのでしょうか!!」

会場は盛り上がっている。敗北した高校も見物に来ている。ドキドキする。

「それでは、決勝戦第1試合。青龍高校代表、黒羽創。慧陵高校代表、ママさん。」

ママさん!?

「誰のママだよ!!」

俺はつい、口に出してしまった。

「いちいちうるさいガキだね。ママはスナックのママ。分かった?」

「はい……。ってことは女?」

「本当にうるさいわね。当たり前でしょ。男がママって呼ばれていたら変でしょ?」

「そうですね……。でも、高校生?」

「……さっさと始めましょ。」

「両者、宜しいですか?……それでは、試合開始!!」

「あんた良い男だね。どう?私と今夜。」

「良いですね。でも、今夜は生徒会の皆で盛り上がりたいと思います。」

「あらそう、残念ね。じゃあ、死になさい!!」

ママさんは、鬼の形相に変わった。ママさんは両手に竹筒を持っている。吹き矢のようだ。それを、順に吹いていった。

「おっと、危ない。」

「まだまだこれから!!」

ママさんは、腰の銃を抜くと、創に向かって連射した。創は、何と銃を刀で弾いている。カッコいい…。創も好い気になっている。しかし、創が膝をついた。

「ぐっ!!」

創の膝には吹き矢が刺さっていた。

「しまった。銃は罠か。」

「その通り。でも気付くのが遅かったわね。」

「僕としたことが…。」

「これで動けないわね。しかし、もう片方も…。」

「ぐっ!!」

創は両膝をついた。手にも力が入らなくなっているようだ。

「仕方が無い…。最後の手段だ…。」

創はポケットから何かのスイッチを取り出した。

「何？そのスイッチは。」

「これが俺の切り札。」

「切り札と言っても何も出来ないわね。」

「それはどうか。」

創はスイッチを押した。

シーン…。

「ほら、何も無いでしょ。」

「上を見てごらん。」

「えっ…。」

ママさんが上を向くのと同時に一筋の光が落ちてきた。その光に打たれ、ママさんは倒れた。

「さようなら、ママさん。」

「ママさん死亡により、青龍高校の勝利。」

「大丈夫か、創。」

「ああ。」

「それより、さっきのは何だ？」

「あれは、衛星からの射撃。」

「……。」

言っている意味が分かりません。

「衛星からの射撃？」

「そう。黒羽組の組長が開発した殺人兵器。このスイッチがあれば誰でも殺せる。」

「はあ……。そ、それって凄いやねーか！！」

「凄いだ！！！」

俺の親父も何か開発してくれねえかな？と真剣に考える俺。

第21話：草薙剣

「続いて、第2回戦を始めます。両者前へ。」

「会長、頑張ります。」

「健なら大丈夫だ。頑張つて来い!!」

「それでは、第2回戦を行います。青龍高校代表、大和健。慧陵高校代表、大和月。」

「健と同じ名字？」

「それでは試合開始。」

「……。」

「……。」

どちらも動こうとはしない。先に口を開いたのは健だった。

「貴様!!」

いつもの健の口調とは明らかに違う。

「実の兄に貴様は無いだろ？」

「貴様など兄ではない。なぜ父さんと母さんを殺した!!」

「お前に言う必要は無い。」

「ならば貴様を倒して聞くまでだ。」

「お前は俺には勝てない。」

『汝、私の体に降臨せよ、日本武尊！』

『汝、私に憑依し、敵を滅せよ、デビル！』

デビル？もしかして…悪魔？十字架を持っていないと…！

「創、十字架持っているか？」

「ああ、ほら。」

「もう一つ持っているか？」

「いいや。」

「くそっ、こうなったら…。」

「会長、何しているのですか？ウルトラマン…っ…？」

声は美貴だった。

「茜は大丈夫なのか？」

「はい、今はぐっすり寝ています。ところでその格好は何ですか？」

「これは十字架を作っているんだ。」

「はあ…。てつきりウルトラマンのマネでもしているのかと思いました。」

「そう言われれば…。恥ずかしい。ところで樹は？」

「樹ちゃんならあそこに。」

「ん！？」

樹は皇と一緒にいた。というかなぜ慧陵高校側にいるんだ？まさか…転校？今はそんなことはどうでもいい。

「久しぶりだな、日本武尊。」

「悪魔に魂を売り渡したか！！」

「そんな言い方は無いだろ？それでも…おっと、これ以上は兄上が言うなってさ。」

「今こそ両親の敵を討つ！！日本武尊が命ずる！！天界の理、地界の理、人界の理を以って悪魔に裁きを与えん！！」

唱えた瞬間、四方八方から強烈な光がデビルに向かって押し寄せた。

「まだまだだな。デビルが命ずる！！黄泉の魔獣よ、光を食らい尽くせ！！」

デビルの周りに3匹の漆黒の狼が出現した。狼たちは、強烈な光を簡単に食べてしまった。

「何…。闇は光よりも強いと言うのか…。」

「当たり前だろ。誰しも光を持っていなくても闇は持っているからな。」

「何てことだ…。しかし、まだ手はある。」

日本武尊は掌を天に向け、目を閉じた。すると、どこからともなく光が集中し、金色の剣を形成した。

「術が駄目なら、直接斬りつけるまで。」

日本武尊は瞬間的なスピードで、デビルの眼前に迫った。そして一閃。

「ぐっ。おのれ。」

デビルの片目から血がポトポト落ちている。

「次は息の根を止める。いざー!!」

「2度も食らうかよ。いけ、魔獣ども。あいつを食らえ!!」

大きな咆哮を上げ、日本武尊に飛び掛った。日本武尊は、金色の剣で薙ぎ払った。魔獣たちは、光の波動で飛ばされ、消滅した。

「そんな…バカな。あの魔獣はAランクの魔獣だぞ…。」

「この草薙剣で切れないものは無い。」

「草薙剣…。まさか！！魔を切り払う三種の神器の1つか！！」

「ようやく気付いたのか。でも遅い。」

日本武尊は、デビルに向かって一撃を食らわせようとした。

「これで終わりだ！！」

「健、すまなかったな…。」

「えっ！！」

振り下ろす直前で、ピタリと止まった。そして、憑依が解け、健に戻った。

「今何て言った？」

「すまなかった。父と母を殺したのは俺だ。しかし、お前を守るためでもあった。」

「どういうことだ！！説明しろ。」

「ああ。実はお前は生贄になる予定だった。俺たちの村では1年に1回、悪魔に生贄を献上する習慣があった。お前には皆が黙っていたが、村1番の靈感の持ち主を生贄にする決まりがあった。そして選ばれたのがお前だ。俺は、何としてもお前を救いたいと思い、契約した、悪魔と。俺と父、母の命と引き換えに健を助けてやってく

れと。」

「そ…んな。」

「だから、本当は月読尊と契約するつもりだったのが、デビルになつてしまった。」

「兄さん…。」

「早く止めを刺せ！！もうデビルは俺の体を支配できる。早くしないと、お前を…。くつくくく。残念だが、もう遅い。死ね、日本武尊と共に。」

グサツ！！

「なぜ…だ…。」

「日本…武…尊を侮るな…。我も…支配しよう…と思えば…出来る。だた…しない…だけだ。」

デビルと日本武尊の両者に剣が刺さっている。

「この剣で…お前を…滅ぼす！！日本…武尊が…命ずる！！悪霊退散！！」

「ぐっ、ぐわーーーー！！」

デビルの魂は消滅した。しかし、どちらも倒れた。

「これでは、勝者が…。この勝負両者引き分けとする。救護班、急

いで。」

健と月が運ばれていく。どちらも重体のようだ。俺の言葉にも返事は返ってこない。

「健…。月…。どちらも助かってくれ。」

第22話：決戦

「本日最後の試合を行います。青龍高校代表、神武空。慧陵高校代表、白立皇。」

「いよいよ、決勝だな。」

「そうだな…。」

ヤバイ！！緊張がピークまできている。おそらく唇は紫色になっているだろう。

「さて、始めるか。」

「ちょ、ちょっと待て。心の準備が…。」

「それでは試合開始！！」

「マジかよ！！」

皇は一気に詰め寄った。

「首は頂いた。」

剣を横に振るう。俺は…膝が折れた。

「ちっ、避けやがったか。」

違う。緊張のあまり、足に力が入らなくなっただけ…。

「さすが生徒会長だな。」

「そ、そうだろ？じゃあ、そろそろ本気出そうかな？」

「そう来なくっちゃ！！」

剣のぶつかる音。皇が縦に振れば、横で受け止め、横に振れば、縦に受け止めた。親父との修行が身に付いている。これは、いけるかも。

「じゃあ、俺も本気で！！」

「えっ！？本気じゃなかったの…？」

「あんたもそうだろ？」

「ああ！！勿論。」

どうしよ…俺はとくに本気なんだが…。

グサツ！！

「痛っ！！」

俺の左肩に刀が刺さった。しかし、肉を切らせて骨を切る！！

「覚悟！！」

俺は相手の心臓めがけて刀を突き出した。

「おっと。危ない。」

皇は刀から手を離し、避けた。

「くそっ…。でも…殺さなくて良かった…。」

「会長!!」

会員の声が聞こえる…。しかし、瞼が重くなってきた…。重傷なのかこの傷は…。皇が近づいている…。しかし、もう力が入らない…。

………だらしがないな。もっとしつかりしろ!!………

この声は…？確か…確か…誉田別命…様。

………その通り。一緒に修行をしたではないか。………

でも…俺には…相手を殺すことなんて…出来ない…。

………仕方が無い。力を貸してやろう。………

『天界の戒めを解き放ち、力を解放せよ!!レベル10解除!!』

俺の体を灼熱の炎が包み込む。しかし熱くは無い。何だか懐かしい感じた。少しだけ、天界にいた頃の記憶が蘇った。天界の規律を学び、同級生と遊び…、そして…。そこまでか。しかし、力は十分!!

「おおゝ力が湧いてくる。今なら空も飛べそうだ。」

「何寝言言ってんだ？そろそろ決着つけるぞ。」

「皇、お前は俺には勝てない。」

「寝言は寝て言え！！」

皇の鋭い一撃が俺を襲う。しかし、俺は指一本で十分。

「何！？指で…俺の一撃を…。」

「やっぱりな。皇…吹っ飛べ！！」

「うわーーーー！！」

皇は、防弾ガラスを割って、場外に飛ばされた。

「……えゝ、場外なので…青龍高校の勝利！！よって、全国大会出場決定！！」

拍手と歓声が渦巻く。

「会長！！」

皆がこっちに駆けつける。健と月は車椅子に乗って来た。

「健！！無事だったんだな！！それと月も！！」

「はい！！まだまだ死ねません。兄も救えたことですし…。」

「良かったな。これからどうするんだ？実家に帰るのか？」

「いいえ、兄と一緒に暮らします。そこで…お願いが…」

「何だ？」

「兄も生徒会に入れてもらえないでしょうか？」

「…いいぞ。ただし、2人で仲良く掃除係りをする事。いいな？」

「はい。」×2

「会長…!!」

樹だ。

「皇の傍に居てあげなくて良いのか？」

「皇って誰？私は会長一本ですよ!!」

殺気が…、何人かの殺気を感じる…。しかし、今回は俺に向いてないみたい。

「樹ちゃん、あなたは駄目よ!!」

「そうよ!!」

「何で？」

「何でって、何でも!!」

4人で激しく?言い合っている。俺としては、またモテ期が到来したようで嬉しいのだが…。

「あの…。」

大会の責任者が来た。

「どうしました?あつ!!表彰の件ですか?」

「いえ…あの防弾ガラスを弁償して頂きたいのですが…。」

「…………。弁償しなければダメですか?」

「はい…。」

「そんなー!!」

こうして、長く激しい3日間は幕を閉じるのであった。

第23話：お泊まり

翌日。

「痛て〜〜!!」

体中がギシギシ言う。まるで、ロボットみたいだ…。

昨日、試合が終わり、皆で俺の家に来た。そして、地方大会優勝を祝して、お祝い。部下が泣き出すし、樹をはじめとする女子は騒ぐ…。

でも、結構楽しかった。誰も欠けることなく祝うことが出来たのは喜ぶべきだろう。

しかし……、樹が

「泊まる!!」って言い出した時はビックリした。連鎖的に、

「私も!!」と続くし…。

だから……横を見ると、創と健の顔がある。結局、皆が俺の家に泊まったのだ。今日は土曜日ということもあって。

「はぁ…。」

「どうしたんだ？寝れないのか？」

「創、起きていたのか？」

「ああ、会長の『痛て〜〜!!』という声で目が覚めたんだ。」

「……それはすまない。ところで、創は体痛くないのか？」

「……痛い。死にそうなくらい痛い。しかし、声に出さないのが男だー!!」

「へえ〜。」

妙に納得。そこへ、

「会長、お早う御座います!!」×4

「ああお早…痛て〜。」

「大丈夫ですか!!」

「痛いって言った方が女子は心配するのか…成程。」

創は学習した。

「痛て〜!!」(創バージョン)

「創君は我慢して下さい。」

「……。会長と僕のどこに差があるんだ?」

「全てです。」

「……。」

何も言えない創。

「そう言えば、健と月は？」

「会長のお父様と話しています。」

答えたのは美貴だ。

「そうか。……お、お父様!？」

「はい、将来お父様になる方ですから。何か？」

「いや…。うつ!！」

やや慣れてきたが、殺気がする。肩の辺りがチクチク…。

「美貴ちゃん？それは違うでしょ。わ・た・しのお父様。」

と茜。

「違います。私です。」

と晴香。

「違うよ。樹のお父さんだよ。」

「あんたは黙ってなさい。」×3

「何で？」

「あなたには皇君がいるでしょ？」

「誰??」

「惚けないで!!」

「まあまあ、その辺にしとけよ。」

「だって…。」

その時、廊下から声が聞こえた。

「皆さん、朝食の用意が出来ましたので、いらして下さい。」

「はい。」

大勢の朝食は何だか懐かしい気分になる。

「我が家って感じだな。」

「いやいや創の家じゃないだろ!!」

「そうだったか?」

「うん!!」

「そうか…。じゃあ僕の家はどこだ?」

「知らねえよ。」

「僕は〳流浪の旅人〳…（以下略）。」

創は1人で熱唱した。

「創さんはいつもこんな感じか？」

月が健に尋ねた。

「いや…今、壊れているだけ…多分。」

「賑やかだな。」

「良いでしょ。」

「良いな…。」

俺は2人の雰囲気涙が出そうだった。

兄弟愛キター（　　）

「兄弟って良いですね。」

と晴香。

「晴香は兄弟いないのか。」

「いるのですが、1人暮らしをしていますから…。」

「へえ、それは大変だな。どこに住んでいるんだ？」

「……………ここです。」

「…………えっ？もう1回言ってくれる？」

「……です。」

「……って……」

「はい。」

「えーーーー!!」（全員）

「いけませんでしたか？」

「いや……良いも何も……犯罪だよ。」

「えっ！？そうなんですか？」

コクリ。

「そんな……。」

「そんなに落ち込まなくても良いんだよ。おじさんは警察に言ったりしないから。何なら一緒に住むかい？」

と親父がフォロー。

「えっ、良いんですか？」

「良いよ。なっ、鈴、空。」

「ええ。」

「俺も良いけど…。」

他の女子の方を見た。やはり、怖い顔。

「はぁ〜仕方がありません。晴香ちゃん、住ませてもらいなさい。」

「美貴ちゃん!!」

「仕方が無いでしょ。」

というわけで、晴香と一緒に住むことになった。一部の女子は納得していないようだが……。

朝食を済ませ、いつもの習慣で自室へと戻りかけた。

「会長、どこに行くんですか？」

「部屋だけ。」

「今から何をするんですか？」

「読書。」

「ど、読書!？」（全員）

「何だよ、皆怖い顔して…。」

「空、お前熱でもあるのか？」
と親父。

「いや、無いと思うよ。」

ここで発言したのは樹である。

「あゝ、分かった！もしかして…エロ本でしょ…！」

「えーーーー！！それって本当ですか？」×女子

「そんな訳無いだろ！！何で皆がいる時に見るんだよ…！」

「そうよね…。でも、いない時には見るんだ…。」

皆からの疑惑の眼差しを猛烈に浴びている。

「見ないよ！！何なら探してみるかい？」

「うん！！樹探す…！」

「じゃあ、私も…！」

「では、僕も。」

女子と創はやる気満々だ。

「健君と月君はどうする？」

「僕はやめておくよ。会長が可哀想だし。」

「俺も。会長とゆっくり話がしたいしな。」

「じゃあ、9時からな。それまでは読書タイム。いいな？」

「はい。」

このゲームが波乱の幕開けになるとは思っていなかった。

第24話：発見！？

丁度9時。部屋を出ると、鉢巻を巻いた美貴、晴香、樹、茜、そして創が立っていた。

「準備万端だよ！！」

手には何やら長細い物を持っている。

「何だそれは？」

「これ？金属探知機。会長のお父さんに借りたんだ。もしかしたらDVDがあるかもしれないし。」

「……それ、ズルくないか？」

「そう？皆もそう思う？」

ブルブル。

一斉に否定した。

「会長に如何わしい物を、見せるわけにはいきませんので！！」

「そうか…好きにしろ。ただし、荒らすなよ。」

「はい。」

本当に分かっているのだろうか。俺は健と月と話をするため、居

間に向かった。

「会長、この度は有難う御座いました。」

「どう致しまして。と言っても何もしていないんだけどな。」

「そんなこと無いですよ。」

「月と健はどこに住んでいるんだ？」

「学校の近くのアパートに住んでいます。」

「生活はどうだ？」

「はい、遺産もあることですし、楽しく暮らしていますよ。」

「そうか。それなら良かった。月はどうだ？慣れたか？」

「まあまあですね。まだ学校も行っていないし…。」

「そうだよな。しかし…女子は煩いぞ。」

「そうみたいです。健からもよく聞きます。え〜と、樹さんのことを。」

「あいつは別格だからな。今も奮闘していることだろう…。」

「へっくし！！あゝ！！誰か樹のこと噂してる！！」

「1回だから悪い噂ね。」

と美貴。

「えー、そんなことないよ。きっと会長が私のこと噂しているのよ。」

「それは絶対無い!!」

と晴香。

「そんなことより見つかったか？」

と創。

「全然。金属探知機にも反応なし。」

………ピーピー。創の金属探知機が反応した。

「おっ!!反応あり。この下か………。」

創は1枚のディスクを取り出した。

「何何？エロいやつ？」

「アンパンマン……。」

その場の空気が一瞬曇った。しかし、次の瞬間には爆笑の渦に変わっていた。

「ア、アンパンマン！！会長そんなもん好きなのかよ！！」

「か、可愛い〜！！」× 4

「きっと、アンパンマン助けて〜って叫ぶのよ。」

「でも、会長優しいから、バイキンマンも助けてあげてって言うと思う。」

「それあるかも〜！！」

「OPテーマも歌っているかもね。」

「ね〜！！」

「おいおい、アンパンマンはないだろ。もし、俺がアンパンマンを見ていたらどう思う？」

「最悪！！」× 4

「会長だったら？」

「可愛い〜！！」× 4

「どんな基準が働いているんだ？」

「女心基準。」× 4

「……分かん。」

「創君は分からなくていいの。さっ、探しましょ。」

美貴に促されて、探し始める創であつた。何だか可哀想…。

一方、居間では。

「しかし、会長も偉いですね。健なんてベッドの下に沢山ありましたよ。」

「け、健！？そうなのか？」

「兄さん！！言わないでよ！！」

「あつ、ごめんごめん。会長に隠し事はよくないなあと思って。」

「もう！！」

「俺はなあゝ、親が部屋を掃除するからなあゝ。」

「ああゝそうですね。見つかったらヤバイですしね。」

「そうなんだよ。」

「でも本当に何も持っていないんですか？」

「んゝ……………！！あ、ヤバイ！！」

「どうしたんですか？」

「いや、1年ほど前に友達が家に持って来た本が……ある!」

「そ、それはヤバイでしょ!」

「うん、ヤバイ。」

「どこに置いたんですか?」

「確か…確か…たんす箆笥の後ろ。」

「た、箆笥!」

「また変な場所に隠したんですね。」

「いや、隠し場所が思い浮かばなくてな。」

「で、それにDVDは入っているんですか?」

「いや、入っていない。だから金属探知機に反応は……、もしかして、ホッチキスで留めてあった場合は?」

「鳴ると思います。」

「それは大変だ!…どうしよう!健、月、どうしたらいい?」

「そうですね……。」×2

「終了させてしまえばいいのでは?」

と健の名案。

「そうか！今すぐ終わらせよう。」

その頃、俺の部屋。

ピーピー。

「ここから反応があるけど…筆筭だよな。」

「きゃー！！会長の筆筭！！見てみたい。」×4

「女子はダメだ。俺が代表で見る。」

「えゝ！！！」

「会長も嫌がると思うぜ。」

「……分かった。」×4

「じゃあ、拝見。」

3分後。

「何も無いな。…もしかして筆筭の裏だったりして…。よいしょつとー！！」

バサッ。

「ん？本が落ちてる。」

その時、俺は部屋についた。

「あーーーーー！！終了！！終了！！はい出て行って。」

「でも、ここに本が落ちてるぞ。」

「何も落ちていないから！！はい、お・わ・り！！」

「はいはい。」

皆が諦めて出ようとした時、樹が素早く箆笥に駆け寄り、本を引っ張り出した。

「あ……。」

もう何もかも終わりだ……。

「筋肉マガジン？」

「え……！？」

「ほら、裸の男の人がポーズしているでしょ？」

「ああ……。」

あれは確か……お袋の本だったような……。

俺は部屋の外を見ると、お袋が立っていた。そして……ウインク。

「お袋……。」

こうして、危ない危ない宝探しは幕を閉じたのである。

「そう言えば、会長アンパンマン好きだったんだな。」

「えっ！？……………親父！！」

第25話：前生徒会登場

日付が変わり、翌日。

今朝も横を見ると、創と健が寝ている。昨日は散々な目にあつた。アンパンマンについての議論が勃発。バイキンマンは本当は寂しがりやだとか、ロールパンナちゃんは実は男だとか……。〔注：これは単なる私の妄想である。〕

しかし、これも今日で終わり。明日からはまた学校の日々が始めるのである。

「か、会長、ぼ、僕の首を返せ。」

「創？大丈夫か？」

「僕の首、僕の首を返しえー！！ムニャムニャ。」

「……一体どんな夢を見ているんだ？」

「空、起きているか？」

「ああ。」

「ちょっと来てくれ。話がある。」

俺は親父に呼ばれ、居間の方へと向かった。

居間に入ると、お袋も座っていた。

「どうしたんだ？そんな深刻な顔して…。」

「いやゝお前も大人になつたんだなと思って。」

「はい？何のことかサッパリ分かん。」

「じゃあ、これは何だ？」

親父は座っている座布団の下から何かを取り出した。

「あつ！！それは…。」

昨日皆が探していたエロ本だった。

「鈴に聞いたぞ。筆笥の後ろに隠してあつたそうだな。」

「い、や、そ、その、それは、えゝと、どう言ったら良いのかな。」

お袋はクスクス。親父はニヤニヤ。本当に虐めるのが好きな両親だ。

「そんなに戸惑わなくても分かっている。かなり埃が積もっていたそうだしな。」

「そう！！全然興味無いし。」

「ふゝん。まあ、お前を呼んだのはこの事がメインではない。全国大会のことについてだ。」

「ああゝ全国大会か。で、いつなんだ？」

「明後日から1週間だ。」

「い、1週間！？長いな……。ていうか、学校はいいのかよ。」

「心配しなくても、次期生徒会が毎日戦っておる。」

「へえ、次期生徒会ね……。じゃあ俺はもう用済み？」

「……分かん。全国大会の結果次第だな。もし負ければ、続行。もし、優勝すれば……。」

「優勝すれば？」

「それは優勝してからのお楽しみだ。」

「何だか気になるな。でも、悪いことは起きないんだろ？」

「ああ。」

「それなら良いや。」

「話は以上だ。今日はどうするんだ？」

「別に……。」

「それなら修行しろ。良い客を招いてある。」

「え！？客？」

「そうだ。まあ、皆が揃ったときに紹介しよう。朝食が終わったら皆を道場に集めてくれ。」

「ああ分かった。」

「お早う御座います。」

居間に寝起き顔の健と月が来た。そして、ぞくぞくと揃い出す。皆が揃ったところで、

「頂きます。」×10

朝から良く食べる創。それとは対照的に少食な晴香。甘いものを頼張る樹。行儀良く食べる美貴。卵焼きばかり食べる茜。大食い競争をする健と月、そして俺。それを見て笑う両親。本当に楽しい朝だ。

「ご馳走様でした。」×10

「あのさ、1時間後に道場に来いだよ。」

「はい。」×7

「道場はこの廊下の突き当たりを右に曲がった奥だから。」

「分かった。」×7

1時間後。

「今日は、明後日の全国大会に向けて、修行をしてもらう。」

俺の親父はまるで高校の先生のようなのだ。

「皆のために特別ゲストを招いている。入ってくれ。」

そう言われて、8人の男女が入ってきた。

「誰？会長知ってる？」

樹に聞かれたが、俺は全く知らない。

「さあ？知らない。」

「この人達は、前生徒会の皆さんだ。」

「ええー！！ってことは…あの有名な？」

「そうだ。わざわざ、（大金を積んで）来て貰ったんだ。」

「へえ〜。」

真実を知らない俺達は気の抜けた返事をしてしまった。

改めて前生徒会の先輩を見ると、やはり存在が大きい。しかし誰が会長か全く分からない。男性が2名で、女性が6名。今の生徒会もそうだが、女子の比率おかしくないか？

「さて、誰が会長か分かるか？」

親父が俺たちに聞いた。

「会長は男だと思うから…1番右の人。」

樹が初めに答えた。

「残念。僕は、掃除係でした。」

いたんだ！！掃除係。少し弱そうだしね。ってことは、右から2番目の人か？

「俺だと思ったでしょ！？ブブー！！残念。俺はお茶入れ。」

「……………」(全員)

まさか…お茶入れ係までいたとは。恐るべし前生徒会。人のことは言えないけど…。

「じゃあ、女の人が会長だった…。」

「何か悪い？」

いち早く返答した女性がいた。

「もしかして、あなたですか？」

「違う違う。私は風紀。」

どおりで厳しそうな人だと思った。けど…会長が分からない。噂

によると、強すぎて全生徒が嫌がったとか…。

「いやー、すみませんな。こいつ達は勘が鈍いもんですから。会長、名乗り出てもらえるかな？」

親父がとうとう助け舟を出した。

「…です。」

今何て？聞こえたのは

「です」だけ。しかも何処から発せられたのか分からない。

「私です…。」

ちょこんと手を挙げる…少女？

「あなたが会長ですか？」

「はい…。」

いかにも気の弱そうな女の人。1番最初に消去法で消してしまっ
た人だ。この人が…噂の魔神会長…。

第26話：第1試合：樹編

「では、改めて自己紹介をしてもらおう。」

「え…と、私は生徒会長をしました斎藤 愛理えりです。」

「私は、書記を担当しました、永井 真沙美です。」

「うちは、副会長をした梅田 和枝やで。梅ちゃんって呼んでや
！！」

「私は、風紀を取り締まっていた、井出 美鶴。何とでも呼びなさい。」

怖え〜！！

「私は軍師をしておりました本村 楓かえでです。」

ぐ、軍師！？どんだけ戦いが好きなのか…。しかし、諸葛亮孔明の様でかつこいい！！俺も会長辞めて軍師になろうかな？

「私は特攻係のイケイケ番長です。プツ！！」

自分で言っただけで笑っているし…。しかも名前が何となく古い。昭和50年代の白黒テレビに出てきそう。

「冗談は置いて、特攻係の行政 薫かあるです。」

「俺が、偉大なお茶入れ係の田中 孫策です。」

「僕が、1番真面目な掃除係の永田 康彦です。」

「宜しく願います。」

俺はぺこりと頭を下げた。

「では、現生徒会の皆も自己紹介して。」

親父に促されて俺達は自己紹介をした。そして、練習相手が割り当てられた。

俺の相手はもちろん会長。樹の相手は副会長だった梅ちゃん。茜の相手は軍師をしていた楓さん。美貴の相手は書記を担当していた真沙美さん。晴香の相手は怖い美鶴さん。創の相手はお茶入れ係だった孫策さん。月の相手は特攻係だった薫さん。そして、健の相手が掃除係だった康彦さん。

「ここはあまり広くないから、順番に行ってもらおう。まずは……樹ちゃん、いつてみよう!!」

「はい。」

樹と梅ちゃん以外は道場の端に座った。現生徒会の皆は緊張の面持ちである。

「準備は良いかな？」

2人ともコクリと頷く。

「では、練習試合第1回戦、始め！」

樹は自慢の大太刀を構えた。

「あら？大きな刀ね。樹ちゃんって力持ち〜！」

「えへへ。凄いでしょ？」

「うん、凄い！でもね、私も凄いんだよ！」

そう言つと、梅ちゃんも6本の刀を構えた。伊達政宗再来！！の
ような感覚？

「どう？凄いでしょ？」

「…………全然凄くないよ。」

でた！樹の負け惜しみ。プライドが高い樹は自分より優れている
人物を認めようとしない。それに……。

「私スイッチ入ったからね。」

樹本気モード。

「まあ、凄い迫力！！」

梅ちゃんには効果が薄いようだ。樹は、体に似合わないくらい素
早いスピードで梅ちゃんとの間合いを詰め、大太刀を横振りした。
それを、梅ちゃんは左手に持っている3本の刀の内、薬指と中指で
支えている刀で受け止めた。

「う…そ…。」

「う…ん、悪くはないんだけどな、動きが雑かな？あと、力不足？」

「この…!!」

樹は上に大太刀を振り上げ、そして力任せに振り下ろした。梅ちゃんピンチ！

キンッ!!

「力は少しマシになったけど、これじゃ全国は通用しないよ。」

梅ちゃんは左手の3本だけで防いでいる。

「強い…、悔しいけど強い。」

見るからに悔しそうだ。それに、相手の強さを認めた…。明日は雨かな？

「もつと自分の力を信じたら？刀ばかりを頼っているように見えるよ。」

「自分の力？」

「そう。あなたは、体は小さいけど、とんでもない力があるように見えるのよね。」

「私に？」

「そうだ！！私の刀を貸してあげる。」

梅ちゃんは、前生徒会メンバーの所に行くと言自分の荷物をあさり始めた。荷物の中は……刀だらけ。

「あつた。これと…これと…」

そして、お目当てのものを見つけると、樹のところへ駆け寄った。

「この2本を使ってみたら？その大太刀を使っていたんだから、2本なんて朝飯前でしょ？」

「はい…。」

「まあ慣れてくれば、うちみたいに6本に増やしてもいいし。」

樹は受け取った刀を両手に持った。

「これは…。」

「しつくりくるでしょ！樹ちゃんのために選んだんだから。」

「私のために？」

「そう。大きな太刀だとしても無駄な動きが出てしまうから、小さくすればもっと力が出せると思ったの。それに、手のサイズも考慮してその刀がベストになって。さあ、再開しましょ。」

「はい。」

樹は右手の刀を上、左手の刀を下に構えた。

「うん、良い感じ。」

「いきます！」

樹は踏み込んだ。今までより刀が軽いおかげでスピードが増した。まずは左手で横振り、そして右手で上から叩きつける。

キンッ、キンッ！！

「わお。予想以上に重い攻撃ね。私に両手を使わせたのは樹ちゃんに初めてよ。」

樹はさらに回転し、左手の刀で梅ちゃんの左横腹に打ち込む。しかし、梅ちゃんはその攻撃さえも受け止める。そして、右足で樹の足を払いのける。その瞬間、樹は重力に逆らえず、前に倒れた。樹が起き上がろうとするが、首に刀を当てられ…。

「これで勝負は着いたわね。」

「うつ……負けました。」

「只今の勝負、梅ちゃんの勝ち。」

思わず俺は拍手をする。なんていい試合なんだ！！梅ちゃんが本気になれば、一瞬で決着は着いていただろう。しかし、梅ちゃんは樹に教えるために……なんていい人なんだ。

「これからも頑張つてね、樹ちゃん。」

「はい。あつ、これ。」

「その刀はあげるわ。私には必要ないし。その代わり大事にしてよ。」

「有難う御座います。じゃあ私のその刀あげます。」

「…………遠慮しておくわ。鞘に入らないし。」

「そんな事言わずに。」

「本当に有難いんだけどね!!」

「遠慮しないで。」

「いやいや。」

最後の最後で樹は梅ちゃんに勝ったようだ。

第27話：第2試合：茜編

「次は…茜ちゃんと楓さんだね。じゃあ2人前に出てきて。」

茜はすつと立ち上がると、俺の方を見た。

「会長、いつてきます。」

「おう、頑張れよ。」

茜は戦場に行くような眼差しで俺を見ていた。もし戦場に行くのであれば、俺は引き止めるだろう、ドラマのように…。

『行くな！！ずっと傍に居てくれ！！』

『私は…私は…御国のために行かなければならないのです！！どうか、私の帰りを待っていて下さい！！』

といった感じ。

しかし、これでは俺が妻みたいだよな？戦争に行く嫁を見送る夫……、何だか情けなく思えるのは俺だけだろうか……。

『残念ですが、戦死です。』

『茜……お前…帰って来るって言ったじゃないか……茜ー！！！！』

俺はハッと我に帰る。ダメだ、変な妄想を始めると止まらなくなる。しかも、結婚の相手が茜だと前提で考えているし……。さて、試

合に集中、集中。

『茜ちゃん、楓さん、準備は?』

「大丈夫です。」×2

「では、始め!」

茜は手裏剣を構えた。楓さんも手裏剣を構えた。

「えっ!?!」

茜は楓さんが手裏剣を使うことに驚いているようだ。

「まあ?何という偶然かしら。私も手裏剣使いなのよ。」

茜は手裏剣を左手と右手から3枚ずつ放った。しかし、簡単にかわされてしまう。

「当たらない…。」

「腕は良いけど、攻撃パターンが微妙ね。」

「これならどう?茜流奥義、猛狐奮迅!」

あれは!予選で見た必殺技!!狐が獲物を狩るように手裏剣が襲いかかる。これなら避けない!

「へえ、そんな技初めて見た。勉強になるわ。」

楓さんは腰に差してある刀を抜いた。しかし、普通の刀よりも短い。柄を逆手に握ると、襲い掛かる手裏剣を、

「楓流奥義、一刀両断!!」

当たる直前で叩き落した。何という集中力!!

「さて問題です!私の武器は何でしょう?」

「えっ…手裏剣?」

「ブッブッー!引っかかったわね。私の役割は?」

「軍師…。」

「そう、軍師は戦わず、策略や戦略を考える者。だから武器は無いの。だからさっき手裏剣使いと言ったのも嘘。」

「じゃあ、私の方が有利ね。」

「そこがダメなのよ、茜ちゃん。武器が無いのも、近距離攻撃が武器なのも、遠距離攻撃に対して不利じゃないの。先入観に囚われてはこの勝負、私の勝ちね。」

「言っただわね!!茜流奥義、猛狐奮迅!」

さっきの倍の手裏剣を放った。すると、楓さんは一步後退。そして、右足で地面を踏んだ。その瞬間、地面から一枚の板が上がった。

カンッ、カンッ、カンッ、カンッ、カンッ……。

板に手裏剣が刺さった。

「そんな…板あった？」

「これが軍師よ。相手の先入観を利用して自分の策を成功させる。」

楓さんは手裏剣を構え、斜め上に放った。

プチッ……。

茜は身構えたが遅かった。板に付けられていた糸を切ったことで、上に吊られていたナイフが茜に向かって落下。

「ナイフなんて無かったのに…。」

茜はどうすることも出来ず、しゃがみ込んだ。しかし、いつまで待ってもナイフは落ちてこない。恐る恐る顔を上げると、ナイフがぶら下っている。

「……………」

「うふふ…。またまた引っかけたわね。」

楓さんはニツコリと微笑んだ。どう見ても楓さんのペースだ。茜はどうすることも出来ないのか？

「良い事を教えてあげる。勝つためには一瞬だけ負ける。」

「????」

「つまり……李代桃僵！」

りだいとうきょう

「??????」

「あつ！こっちの方が難しいか…。意味はね、戦局の進展によっては、必ず損害を覚悟しなければならぬ場合もある。そんな時は、局所的な損害と引き換えに、全局的な勝利を勝ち取ってこと。」

「はあ。」

「まだよく分からないかな？こうなったら実践あるのみ！！え」と
…掛かって来なさい。」

茜は小刀を握ると、楓さん目掛けて突進した。

「私は柔道経験者よ。そんな小刀で勝てると思う？」

それでも茜は楓さんに迫って行った。

「……どうやら本気のようなね。じゃあ遠慮なく。」

楓さんは小刀を持っている腕を持ち、一本背負い。

ドンツ！！という音を立てて、茜は落ちた。しかし、すぐに手裏剣を投げる。

「おっと、惜しかったわね。残念……。」

何だか様子がおかしい。

「くっ…。」

楓さんはその場に倒れてしまった。よく見ると、血が流れている。

「へえ…やれば出来るじゃない…。」

楓さんの足にナイフが刺さっている。

「これは私が使ったナイフね…。全然気づかなかったわ…。」

「試合はここで終わり。おい、楓さんを運んでやれ。」

「へい。」

親父の部下が楓さんを背負っていく。茜…何てことをしたんだよ！死んだ人の恨みは…怖いんだぞ！って勝手に殺しているし…とにかく、俺もいつかグサツと刺されたりしないかな？

「会長、どうでした？」

「いや…す、凄かったよ。」

「会長も他の女の人の所に行ったら…許しませんからね。」

「……………はい。」

お、おい、俺は茜と結婚か！？俺は他に……。

「どうしました？」

「へっ？い、いや……何でもない。つ、次の試合にこうぜ。」

第28話：第3試合：美貴編

「次は…美貴ちゃんと真沙美さんだね？」

「はい。」×2

美貴は落ち着いた感じた。対する真沙美さんは……ガツチガチ。

「宜しく願います。」

「は、はい。よ、宜しく願いましゅ…します。」

どっちが年上か分からない。

「では、始め。」

美貴は素早く拳銃を構え、発砲した。えっ…発砲！…いやいや危ないだろ。使うのだったら、水鉄砲にしろよ。しかし美貴は特に気にした風もなく、連射している。

「ひゃあ、ひよっ、あ、危ない。」

真沙美さんは…避けている。もしかして超能力？美貴はどうして当たらないのか不思議に思っているようだ。

「ちょ、ちょっと待って貰えますか？」

「別に良いですけど。」

真沙美さんは背中に背負っていたリュックから拳銃を取り出した。

「……………」

皆哑然。なぜリュック？ホルスターとかに入れておけば直ぐに取れるのに…。

「リュックに入れておくと、安心するの。」

「へえ。」

「さて、殺りますか!?!」

パンツ、パンツ、パンツ、パンツ…。

まるで別人のようだ。笑いながら銃を撃っている。しかも相手の頭を狙って。

「当たれ、当たれ、当たれば死ぬよ。」

「…………怖っ。」

俺達は口からそう漏らしていた。

パンツ。

「何か言った?」

俺の頭の上に銃穴が空く。

「い、いえ！何にも言っていないません！！なっ、創！」

「さっき会長が怖いって言っていました。」

おい、こら！！何を言っているんだ！！俺は一言も怖いとは……
言っただけ！！言っただけ……言っただけ！！

真沙美さんはゆっくりとこっちにやって来る。

「お、俺、いえ、僕は何もい、言っていないえん。」

真沙美さんの表情が怖い。

「……会長さん？」

「はい……。」

「あなたは私の好みだから許してあげる。」

「へっ？」

「でも、こっちは許さない。」

「なぜ僕がー？？？？」

創の顔が引きずっている。

「会長に罪を擦り付けたから。」

「いや、だって……。」

「言い訳するんじゃない！見つとも無い。」

「真沙美、その辺で止めときなさい！！」

ビクッと真沙美さんの肩が上がった。

「愛理会長…分かりました。」

あの真沙美さんが恐れる程の会長とは……。

「さて、美貴ちゃん再開しましょうか。」

「そうですね。」

真沙美さんと美貴は撃ち合った。様々な所に穴が空いていく。親父も顔が青くなっている。

「ちよ、ちよつと2人この銃に変えてもらえるかな？」

親父が持ってきたのはゴム弾。これで撃たれても死ぬことはない。

「……仕方がないわね。」×2

全国を統べる親父にため口とは……。部下の顔が引きずっている。

2人は仕方がなさそうに、ゴム弾入りの銃を受け取った。

「美貴ちゃん、あなたの腕は認めるわ。でも、躊躇しては全国で死ぬわよ。情けは必要ないの。いつも本気で！」

「はい。」

パンツ、パンツ、パンツ、パンツ…。

「腕を狙う暇があったら頭を狙う!」

「はい。」

「躊躇しない!」

「はい。」

「あなたは優しすぎる。」

パンツ!

「うつ…。」

真沙美さんのゴム弾が美貴の頭に当たった。美貴はそのまま倒れ、天井を睨んでいた。額は赤く染まっている。そして、美貴は両手で顔を覆い、泣き出した。

「甘い子ね。今までよく生き残れたわね?」

俺は美貴の傍に駆け寄った。

「美貴、大丈夫か?」

コクコクと頷く。

「あら？会長さんも優しいのね。そんなんじゃ愛理会長には勝てないわ。」

「俺は…俺は…勝てなくてもいい。全国で勝てなくてもいい！ただ皆で笑って日々を過ごしたいだけだ！！」

「ふん。私には分からない。この生徒会も終わりね。」

パンツ！！

「痛っ。」

「会長を侮辱するのは許しません！」

美貴は立ち上がり、真沙美さんに銃口を向けていた。真沙美さんの額も赤く染まる。

「やれば出来るじゃない。その気持ちを忘れないことね。」

真沙美さんは後ろを向くと、前生徒会の許へと帰って行った。

「もしかして、この事を教えるために、わざと…。」

美貴は真沙美に深々と頭を下げた。

「一時はどうなることかと心配したけど、解決じゃな。さっきの勝負は真沙美さんの勝ち。」

文句なしだ。前生徒会の存在は大きくなるばかり。俺達はまだまだ

だ成長しなければいけないな。

第29話：第4試合：晴香編

「さて、晴香ちゃん、美鶴さん準備の方はどうかな？」

「大丈夫です。」

同じ言葉だが、美鶴さんは怖い声。想像できるかな？

「始め！」

晴香は忍者刀を鞘から抜き、構えた。身長に合った刀である。ここから見ていると、映画の撮影を見ているようだ。実は、俺の練習試合は最後なのでとても緊張している。他の事を考えていないと精神が保てそうにない。だから、自分は映画の撮影に來ていると今回は思い込む事にした。

「いきます！」

晴香は駆け出し、刀を低く構えた。美鶴さんは腰につけた2本の刀を抜き、そのまま目を閉じた。怖い美鶴さんはイメージ的には突進しそうなのに・・・。

「井出流奥義……轟！！」

美鶴さんは突進した！やっぱりイメージ通り。しかし、力強さとしなやかさで晴香に打撃を与える。美鶴さんは真剣を使っていないようだ。

「強い……。私の何倍も……。」

「あなたに奥義を使う事なかったわね。」

「言いましたね！！朝倉流奥義、どっかーん！！」

晴香は忍術で5人に分身した。すっげー！授業とか受けなくても良いじゃん。などと感心していた。

晴香の分身は美鶴さんに上、横、後ろ正面から切り掛かった。もちろん逃げ場は無い。

「少しはやるようね。でも…井出流奥義、瞬！」

それは一瞬だった。後ろ、横、上の晴香が消され、正面の晴香が床に倒れていた。

「見えなかった…。差がこれ程とは…。」

「もう戦えない？見た目と一緒にであっさりしているわね。」

「くっ…。」

先程の一撃が重かったのか晴香は立ち上がれそうになかった。

その時、1人のおじさんが部屋に入ってきた。

「お前もまだまだだな。」

誰？？皆の頭に？マークが並ぶ。

「父上…。」

晴香のお、お父さん!?

「神武さん、いつも娘がお世話になっています。」

「いえいえ、こちらこそ。」

「父上、なぜここへ？」

「神武さんに招待を受けたのだよ。それにしても……そんな相手に負けているようでは、朝倉家の恥だな。」

「失礼ですが、それはどういう意味ですか？」

「そのままじゃよ。」

「酷い事を言いますね…。」

美鶴さんは目を閉じた。まさか!!

「井出流奥義……轟!！」

先程出した技を晴香のおじさんに向けて繰り出した。

「晴香、よく目を開けて見ておれ。」

「はい。」

「朝倉流裏奥義……清。」

おじさんは美鶴さんが向かってくるのをただ見ていた。武器は何も手にしていない。直前まで迫った時、おじさんが5人に分身した。そして流れるような剣捌きで1撃、2撃と切っていく…。しかし、一瞬の出来事なので、何撃かは分からない。

「くっ… いつ抜いたのか分からなかった。」

腕や足から血が流れている。傷は無数。

「今ので15回切った。おぬしに見えていたか？」

「うっ…。」

「晴香は？」

「見えました。」

おじさんは頷いた。

「お前には黙っていたが、奥義とは別に裏奥義が存在する。全国大会まで明日しか無いが、みっちり教え込んでやろう。さあ帰るぞ。」

「はい。」

おじさんと晴香は俺達に軽い挨拶を交わすと帰って行った。そして、美鶴さんというところ……部屋の隅で小さく丸まっていた。あの怖い美鶴さんが…。

「先程の勝負は……美鶴さんの勝ちで良いかな？」

「当たり前よ。」

小さな声で答えていた。こうして見ると可哀想な気もするが仕方が無い。強い人にもより強い人がいる。

「覚えていなさいよ……あのオヤジ……。いつかきっちりと……。」

やっぱり怖い人だと俺は再認識した。

第30話：第5試合：創編

「今度は男の戦いだな。じゃあ創君と孫策さん、前に出て。」

いよいよお茶入れ係の対決。

「始め!!」

創は刀を抜き、一歩踏み出した。

「……………」

いつの間にか創は孫策さんの後ろにいる。これは初めて創と出会った時、見せ付けられた実力。

「うそ…いつ切られたの?」

孫策さんは腕から血を流している。しかし、いつ切られたのか自覚が無いようだ。

「すみません。降参します。」

「……………」

創は一言も話していない。ていうかもう終わり?さっき始まったばかりだぜ!!孫策さんは三国志に出てくるような強い男ではなかった。しかも、本人は美鶴さんの隣で丸くなっている。

「僕達一緒だね…。」

「お前と一緒にするな。私は負けてなどいない！」

「僕だつて…。」

創は孫策さんの肩を叩いた。創が睨んでいる。

「ま、負けました。」

余計に落ち込む孫策さん。創も手加減してあげたら良かったのに…。

「会長が僕を前線に立たしてくれなかったからだ。会長が…。」

ゴンッ!!

何だか嫌な音。その正体は…。

「会長…殴らないで下さいよ…。」

孫策さんは殴られて頬を腫らしていた。

「今、私は何だつて？」

「いえ…何にも。」

「男だつたらね、はっきり言いなさい!!」

あの大人しそうな会長がキレた。

「会長が前線に立たしてくれなかったから…。」

「だから何？」

「僕が弱いんだ！」

ゴンッ！！

また殴られた。初めはハイテンションだった孫策さんも、今は地獄の底にいるくらいローテンション。終いに孫策さんは半泣き状態。

「な…殴ることなんてないだろ！！親父にも殴られたことないのに！！」

パチンッ！！

今度は美鶴さんの平手が飛んできた。

「人のセリフをパクるんじゃない！！」

「美鶴まで…。」

パチンッ！！

「呼び捨てしないで！！」

「うつ、うわーん！！」

あゝあ…泣き出した。俺まで泣きそうになってきた。可哀想な孫策さん。

「創、助けてやれよ。」

「僕が？会長が助けてやれば？」

「お、俺？む、無理無理！！戦争のど真ん中に武器を持たずに飛び込むようなもんだぜ！！」

「仕方がないな。」

創は孫策さんの許へと寄った。

「あの～それくらいにしといて貰えませんか？」

「創君がもう一度孫策と戦ってくれたらね。」

会長が微笑む。

「僕は別に良いですけど。勝っちゃいますよ。」

「ふふ、勝てれば良いね。」

「??」

創は首を傾げた。俺も自然と首が傾く。

「え～さっきの試合は無かった事として、創君と孫策さん準備は良
いかな？」

「はい。」

「では、始め！」

「お前のせいだ。お前のせいで…。お前がいるから…。俺は…。お前を倒せば…。俺は…ハッピーになれるんだ！！」

孫策さんは両腕を上げた。その瞬間、孫策さんは覚醒した。

「やっと出て来れたぜ。つたく、弱い奴だよな？」

「あなたは？」

「あ？俺か？俺は孫策。簡単に言つと裏孫策みたいな？」

「はあ。」

創は刀を抜き、先程と同様、一歩踏み出した。そして気付いた時には、創は裏孫策さんの後ろにいた。

「がはつ。」

創が腹を抱えて両膝をつく。

「まあまあかな。でも俺にしては遅い。切られないだけ良かったと思いな。」

「僕の方が速かったはず…。」

「速さは関係ない。肝心なのは動きについていく目を持っているかどうかさ。」

「目？」

「そう。」

「これならどうだ！」

創はさっきより速い攻撃を仕掛けた。

「見えてるから関係ない。」

またしても創は腹を抱えた。しかし今度は倒れこむ。

「次同じ事をしたらねじ伏せるよ。もう一度だけ言うけど、目だよ目！もし無理だったら諦めな。才能が無かったって事。」

「俺は…諦めない…絶対…全国で…優勝して…モテるんだ！！」

「……………」

啞然。薫さんだけ笑っている。

「それが目的で大会に出場するのか？」

「悪いか？」

「いいや、良い夢だ。俺と気が合いそうだ。」

「それはどうも。僕はその目的を果たすまでは負けられない。」

創は目を閉じた。そして数秒。

「よし!!」

創は眼光鋭く、一步を踏み出した。

「少しは成長したようだな。」

孫策さんの服が切られていた。しかし、

「あつ。。」

創はまたまた腹を抱えて倒れこむ。

「少し本気でやらせてもらった。じゃあこれから頑張れよ。」

そう言つと、感じが変わった。

「頑張ろう!あれ?何で創君倒れているの?」

もしかして…。会長が孫策さんに何やら耳打ちする。

「えっ!?僕、勝つたの?でも全然覚えていない……。」

やっぱり。憑依した時の俺のようだ。まあリベンジを果たせて良かったんじゃない?と俺は孫策さんに対して思った感情。

第31話：第6試合：月&健編

「次は…月君と薫さんだね。」

月と薫さんは前に出た。薫さんはニコニコ笑顔。月は冷静に相手の様子を伺っている。

「では、始め！」

「私は特攻係だったから直ぐに終わらせてあげる。」

薫さんは刀を2本構えると、突っ込んだ。月は何も武器を持っていない。まさか…また悪魔を召喚するつもりじゃあ…。

『汝、私の体に降臨せよ、月読命！』

えっ？悪魔じゃない…。

「何叫んだのか知らないけど、武器を持った方が良いよ？」

薫さんは刀を振り下ろした。

「縛。」

「えっ…体が…動かない…。」

月はニヤツと笑った。

「神に挑むとは、良い度胸しているな…飛べ！」

「きゃああああ！」

薫さんは後ろに吹っ飛び、壁に激突した。

「何これ。」

「薫。」

「何ですか、会長？」

「あなたでは勝つ事はできない。降参しなさい。」

まさか前生徒会長が降参を促すとは…。

「うつ…仕方がありません…その強さなら全国でも通用するでしょう。私の負けです。」

認めた…！！現生徒会、初勝利！やはり月は只者じゃなかった。月が俺の前に来た。

「会長、実は昨日、月読命と契約したんです。俺の命と引き換えに力を貸して下さいって。」

「えっ。」

「冗談ですよ。神様は人の命を引き換えの材料にしたりしません。」

「なんだ、脅かすなよ！！！」

「すみません、会長がどれくらい心配するか見てみたくて…」

「俺はいつでも皆の事を心配しているんだぞ。」

「それを聞いて安心しました。有難うございます!」

「月君の圧倒的な強さでやっと1勝か。1勝もできないと思っていたから善戦だ。さて、健君、康彦さん準備は良いかな？」

親父に促されて頷く2人。そして、緊張した面持ちの健が前に出る。月は健にガッツポーズする。それに応えるように頷く。

「では、始め!」

康彦さんは懷からナイフを取り出した。

「僕は掃除係だったから大会にも出れなかった。だから、ここで僕の素晴らしさを皆に見てもらおうと思う。いざ!」

康彦さんはナイフを両手で握り締め、突進した。それではまるで殺す気満々ではないか。しかも実戦経験無いのが一目瞭然。

『汝、私の体に降臨せよ、日本武尊!』

「あれ?もしかして。」

「そのもしかしてさ。健と月は兄弟だからな。縛、縛、神縛。」

「動…かな…い。」

「私は月読命ほど優しくないからな。」

「そんな〜。」

「康彦君。」

「会長〜降参しても良いですか？」

「戦いなさい！！」

「へっ！？なぜ……。」

「あなたはとことん負けなさい。」

「そんな〜！！」

「では。」

日本武尊は動けない康彦さんに右腕を翳し、右にスライドさせた。

「うわあああ〜！」

康彦さんの体が右に引つ張られる。今度は左に、そして右に…。

「う…。も…う…や…め…て…く…だ…さ…。」

ガクツと首を垂らす康彦さん。

「もう終わりですか？それでも前生徒会の方ですか？」

日本武尊は呆れた顔で言った。

「僕…は…掃除…係…。」

「おや？まだ意識があっただんですね。では！」

まだ同じ事を繰り返す日本武尊。楽しんでいる。敵に回したら厄介だなと思う。今度こそ康彦さんは意識を失った。前生徒会の視線は冷たい。

「もう戦えないようなので…健君の勝…。」

「待って下さい。」

発言したのは前会長。

「叩き起こして下さい。」

鬼がいる。初めはおしとやかそうな女性だったが、豹変した。

「しかし…。」

「私が叩き起こします。」

そう言つと、項垂れている康彦さんの傍に行き…。

バシッ！！バシッ！！バシッ！！

3連ビンタ。

「はっ！ここは？」

「戦いなさい。」

「へっ？」

数秒後、事態を思い出した康彦さんは、

「負けました。」

「えっ！？」

皆がポカンと口を開けている。前会長だけは笑顔。

「よく頑張りました。負けを認める事も戦う事です。」

それなら初めから認めさせるよ！と言いたくなつたが止めた。

「何か？」

前会長が俺の方を向いて満面の笑みで尋ねた。

「いえ！何も！」

見透かされていた様だ。

「本来ならば死ぬまで戦って欲しいところですが。」

やはり鬼だった。俺はこの鬼と戦うのか…人間の俺に勝てるだろうか？食べられはしないだろうか？逃げたそうか？などとネガティブ思考を働かせる俺だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0003e/>

俺の生徒会

2010年10月16日00時27分発行